

ために、當局者も識者も、もつと注意をひけてよいのである。

芝浦では船主と荷主とが相談して、法令下に、共済組合を作つてゐる。病人と頻發する負傷者と共に、治療を行ひ、彼の經濟生活の部分的な救護を行つてゐる。これが芝浦唯一の消極的な文化的施設である。これでは労働力を思ふ存分に發揮することは不可能である。

生産力擴充の必要は、先づ最も苦役の労働、割の悪い、下積みの仕事と仕事場とに、最も熱心な努力がいたされ、その労働力がよく培はれねばならぬ。さうでなくてはこの戦時體制下に於て、國民が一つの心になつて心の底から、お國のために働くことが出来ないのと思ふ。私は最も氣の毒な、問題にされてゐない労働の一つとして、沖仲仕の労働の現状をとらへ、識者の考慮を求めやうとするのである。

仲仕を訓練して、その労働に規律を與へることは、その荷役能率向上の第一

歩である。仲仕に技術的習熟を與へることはその第二步である。これらの二つの手段は頻發する災害の防止の最も賢明なる方途である。

また彼等に休養を與へ、その教養を高めるために、立派でなくとも、整備した宿泊所を與へることは、労働の規律化と技術的教養の機會を與へるための必須要件である。一人當り一日の荷役の噸數を推定し、その標準によつて、荷役労働を強制せんとする試みが、會社側や荷主の間に、從來屢々試みられて來たのである。私のところへ、かかる意圖をいだいて相談に來た人もあるのである。凡そかかる事は、甚だ具體的であるやうに見えるが、基礎をしつかり確めないで、人間の生活や労働力の基調をふみしめてかからないで、標準噸數を割出さうといふこと自體が間違つてゐるのである。そんな考へ方を資本主義的といふのである。私の云ふのは科學主義である。人間主義である。先づ人間を養ひ、人間を養ふことによつて、人間の能力を高め、働き方を正しくし、技術を與へ、

以つて仕事への興味を奮ひ起さしめ、荷役能率をあげようと云ふのである。

六

歸らうとすると柳澤君は是非自分の下宿に立寄つてくれと云ふ。どこだときけば、雅叙園の近くだといふ。雅叙園の前に幅二尺位の露路がある。そこを入ると小さな勝手口である。彼はどンドン入つて行く、あとについて行くと、急な段階子がある。それを上ると彼の下宿だ。室は六疊である。彼は彼の仲仕仲間との氣の合つた連中四人とここにねぐらを定めてゐるのである。

勤 勞 と 文 化

家賃は六疊十三圓である。相當高い。四人であるのだから一ヶ月約三圓であ

る。火鉢に火が入つてゐて、アルミの薬罐にお湯がシユンシユン沸いてゐる。彼は部屋の片隅から紙袋をとつて来る。彼はその袋をさいた。中からモナカが顔をみせた。番茶を淹れてコップについた。彼はこのコップで好きなビールを飲むのであらう。清潔に洗つてあるのがうれしい。飯をたいてゐるから是非一

戦 時 の 沖 仲 仕

緒にたべると云ふのを、約ある私は、彼の心からなる歓待を辭退して歸ることにした。

大通りに出ると、彼は追つかけてついて来てゐる。手にリンゴの籠をさげてゐる。昨夜、郷里から来た彼の友が土産にもつて来たのであるが、今日私が彼を訪ねるといふので、私のためにとつておいたのだから、是非もつて歸つてたべてくれと云ふのである。東京の港のど真中の沖仲士の群の中にゐて、彼はなほ農村人の親しみをもちつづけてゐる。仲仕ではあるが、彼はまだ純然たる信州の農村青年であることが、何よりもうれしい。彼と再會を約して歸つたのである。

## 勤勞と文化

### 一、勤勞人生觀の確立

わが日本の歴史を回顧してみると、國民の間に勤勞の精神が漲り、國民が勤勞以つてその業に服してゐたときは、わが國運がめきめきと伸張し、國民の生活は向上安定し、國民の文化が一段とその光彩を加へた時であるが、これに反して、國民が懦弱になり、勤勞をいとひ、働かうとする意志が萎靡し、沈滞した時には、國運が下り坂になり、國民の生活は貧窮し、天下の蒼生はその生活に安んじ得なかつた時である。

世界史上に於ても、ある國民が勤勞を悦ばず、勤勞を厭ふやうになつた時に

勤勞と文化

は、必ずその國家の運命は衰退し、遂に滅亡の悲運にすら轉落してゐるのである。この事實は、國民の勤勞意志と勤勞力とが、國家興亡のよつて以つて分れる動因であり、國家の運命は常にその國民の勤勞に重大なる關係をもち、また國力の開拓は、一つに國民の勤勞能力の發揚によつてなされ、國民生活の安定も亦、その勤勞に基づいて常に最も健全に確保せられるものだといふことを示すものである。

産業報國運動は勿論のこと、國民生活に新體制を望まんとする運動は、國家の興亡と國民の勤勞とが、常に全く不可分の關係にあるといふ、この世界歴史上の事實の上に立ち、わが日本が、今日直面してゐる重大な政治的問題、即ち内に新日本の體制を樹立し、進んで東亞に新秩序を建設するためには、國民の間に、勤勞を尊び、勤勞を敬ひ、勤勞の生活、つとめはげみ倦むことを知らなるといふ生活態度と、その實踐とを普ねからしめねばならないといふ、理念の

勤勞と文化

上に立脚しなくてはならぬと思ふ。

富めるものも、貧しきものも、上層も下層も、事業主も勞務者もあげてこの人生の歸趨と、國家興亡の歴史的事實を自覺し、勤勞せんとする旺んなる意志と、勤勞の實踐とによつて、新たな國民生活體制の樹立に邁進しようといふのが、新しい生活の理念であり、實踐である。

勤 勞 と 文 化

志を立て、一意、その業にはげむのである。この道、この生活こそ、人が身を立て、家を興すことの出来る處世の大道である。勤勞こそは人の立志と齊家との唯一の基本であるから、この上に於てこそ、われらはまた國民としての奉公の生活をいとなむことが出来る。即ち吾々は勤勞する生活によつて、始めてよく、われらの國民的任務即ち社會と國家とに奉公し得るのである。勤勞が萬民の生活の普遍的な大道であると云ふのは、これらの省察によるのである。知に至り、徳に至ること、即ち人生の向上をもたらす原動力が勤勞の生活の中に

あるのである。

勤 勞 と 文 化

身を立て、家を興し、以つて國民と國家とに奉公せんとする志に於て、事業を統理し、産業を經營しない人は、奉公の念慮に缺くところがあるのである。またこの志に於て勞働せんとする勞務者をもたない事業場は、わが國では、國家の興隆に參與する事業場ではないのである。志を立て、奉公の誠を以つて作業する勞務者の勤勞を基調とする事業場でなくては、最早國家的要請に即應し、時局の要求する生産を擔當するところの事業場ではないのである。また、さういふ事業場でなくては、本當の意味に於て、生産的に活動することも出来ず、その生産力を遺憾なく發揮することも不可能なのである。國家は、かかる基礎に立つて生産に邁進する事業場と、その經營主と、勞務者とを極力援助し、その生産能力の發揚を遺憾なからしめ、勞務者の生活の安定を確保せんとし、そ

の生産的活動に、満幅の期待と信頼とをにかけてゐるのである。従つてかかる理念と實踐との上に眞に、生産的に活動してゐる事業場の經營者と、その勞務者とは、みなその志に於ては、一つである。即ち同じ志の下に、その職責と勤勞とによつて、各自の人生を向上しようといふ意欲と實踐とが漲つてゐるのである。その漲り溢れる意氣と生活力とが、經營に磐石の基礎を與へ、その勞務者の生活の本質的な向上と安定とを促がす原動力であり、それが生産力の擴充と國防國家の建設の推進力となつて顯はれるのである。

九千萬の國民は、みな各々その職分を有つてゐるのである。國民がその從事する業に於て志を立て、その志に於て、身を立て、家を興す、これが國家興隆の原動力である。また勤勞大衆が匹夫から身を興すのも、貧窮を克服して、豊かな、一層高い節度とをその生活に築き上げること、産業經營の振作も、産業經濟や國民經濟の發展もあげて、この勤勞せんとする意志とその鞏固なる實踐

力にかかつてゐるのである。

二宮尊徳先生は、貧困にあへいでゐた農村の經濟更生の爲に、その全生涯の努力を傾倒した人である。徳川時代の末期に於ては、世は三百年の太平に慣れ、國民の間に奢侈が流行し、民心が緩み、懦弱になり、武士道はすたれ、人みな利につき利を追ふことにのみ汲々としてゐたのである。この國民生活の弛緩の間隙に乗じて、北方サガレン島を通じて、蝦夷から露西亞の勢力が日本をねらつてゐたのである。南からは、太平洋の波濤を越えて、歐洲とアメリカとの勢力が浸々として迫つて來たのである。内に力の充實しない當時の徳川政權は、その鎖國主義を、益々、強固にせざるを得なかつたのである。西方からも、朝鮮半島を通じて支那大陸の勢力が日本海を越えて迫つてゐたのである。勤勞せんとする意志が衰へ、生活の根本、人生向上の原動力たる勤勞の理念と實踐を見失ひ、人生の光を失つた國民にとつては、實に内憂外患であつたのである。

丁度、その時代である。日本の農村は貧窮のどん底にあつた。労働が輕んぜられ、勤勞が重んぜられない世の中では、百姓は人間のうちに入らなかつた。水呑み百姓と人は呼んだのである。百姓は人間のカスであると思はれてゐたのである。かかる貧窮のどん底にあつた農民をして、志を興さしめ、これをはげまし、これを目醒めしめ、これを富ましめようとし、而もその實踐の根本目標を、單に所得や物にのみこれをおかず、ひたすらに、人間の正しき勤勞、つとめはげむ生活の振作こそ、經濟力の原動力であることを主張したのが二宮先生であつたのである。

二宮先生には、三つの主張があつた。勤勞と分度と推讓とがそれである。先生は別に學問をした人ではない。先生は何れの學派にも屬してゐない、街の中、村の中で人生を學んだ人である。先生の經濟論は、世の中の眞ただ中での、人生修業の生活の體驗から建設せられ、その生涯を通じての生活態度が、自ら先

生の主張を一貫してゐるのである。

貧困のどん底に陥り、生活の態度が亂れ、その生産力は萎靡し、沈滞し切つた當時の農民生活を、如何にすれば、豊かならしめ、それに生氣潑刺たる生産力を附與し得るか、また農民をして、家を興さしめ、村を立て直し、以つて日本の運命を開拓するために眞に役立つ力をもたしめるには、どうすればよいのであるか、これが先生の一生涯を通じての努力であつたのである。

先生の農村更生策の核心は、農作物の増産ではなかつた。それは農業更生の目標ではなくて、生活活動の結果に過ぎなかつたのである。先生の目標は人間——農民そのものの資質の向上であり、農夫の人生の向上であつたのである。それを先生は農民の勤勞、農にはげみ農につとめる生活によつて達成しようとなつたのである。即ち格勤にして樂業する農民を造ることであつた。志を立て、勤勞によつてその心を練り、その體を練り、以つて國民的資質をもつた農民的人

格を村に育てあげ以つて農道を宣揚することが先生の農業再建の核心であつた。農民は先づ、人間にならなくてはならない。人間にならねば農業の振興は出来ぬ。農道が明らかにならなくては、農村の再建は出来ぬといふのが、先生の主張であつた。而も先生の實踐に於て、最も注目せらるべき點は、勤勞の究極が報徳に歸入してゐることである。即ち勤勞以つて國家に御奉公するといふことが、勤勞の精神なのである。國に報ひ、世の中に報ひ、父母に報ひ、自己に加へられたもろもろの恩澤に報ゆる、ここに勤勞の眞義があることを、自らの生活の實踐を以つて、人々に示したのである。

## 二、勤勞による自己啓發並びに文化向上

貧窮のどん底から眞に農民を浮び上らせ、その生活を、本當に向上する方法は、勤勞を他にしてはない。國運を啓くのも、國家の興隆も、この勤勞にかかつてゐるのである。それ故に勤勞は尊ばるべく、勤勞することは敬はるべきで

ある。嘗つてわが農民と農村とを、その貧窮より救護し得たこの勤勞觀は、明治時代に至つて、所謂資本主義の發展と共に忘れられたのである。明治大正を通じて、屢々、起つた社會と國民生活との不安は、國民に、上述したやうな正しき勤勞觀が失はれ、勤勞と勤勞者に對する尊敬が失はれたからである。勤勞する國民が勤勞の崇たる所以を自覺せず、勤勞すること、勤勞者たることを自ら卑下したのである。

國民思想の動搖は、過去に於ては、いろいろな原因によつて起つたのであるが、最も深刻に國民生活に動搖を與へたものは、常に國民生活の中に勤勞せんとする意志が萎靡し、人生の向上の根本が勤勞の生活にあることを自覺せず、勤勞の實踐が輕んぜられ、安逸と、遊惰と、功利とに、國民の生活が覆ひつくされた時であつたのである。即ち國民に、正しい、堅固なる勤勞人生觀が確立されてゐない時に、問題が起るのである。國民の間に勤勞に對する正しい觀念

が崩れて来ると、國民生活が不安になるのである。

徳川時代に出た、尙、もう一人の經濟學者である佐藤信淵は、その著、經濟要録の中に於て、國民の生活を豊かにし、國民生活を安定せしむるところのは勤勞である。業に於ていそしむことであると云つてゐる。而も勤勞に従事する人が、その業に於て楽しみ、楽しんで仕事をする事にならなくては、生活が向上し、安定しない。發奮して業をなせば、その業は進み、生活は楽しくなり、生活が安定する。之が經濟の根本であるといふ意味のことを云つてゐる。

勤勞と文化

明治、大正の時代を通じて、西歐から科學と技術とが輸入され、人間の仕事が機械に置き換へられ、日本の工業機構は大機械工業に移ると同時に、人間の勤勞の尊さが忘れられてしまつた。工業は資本と、動力と、原料と機械とさへあれば經營が出来る。資本を運営し、機械と原料とを整へ、機械に配置するに勞力を以つてすれば生産は可能である。製品を造ること、そしてそれによつて經

勤勞と文化

濟的利益を得て行くこと、それが生産的な事業であるといふ考へになつた。人智の働きや人のはげみや、はげむことによつての人生の向上などといふことは、殆ど問題にもならなかつたのである。人々は資本を重視し、生産機械の進歩改善には、極力、力を注いだのであるが、人の品性を高め、人間の生活を向上することの大切さを忘れてゐたのである。人間は機械の從屬者となり、人を造ることよりは、物を造ることの方が一層に大切であり、人間の働らきのねうちよりも、機械や動力の働らきの方が大切なものとせられ、人間の勤勞のねうちは、生産費中に於て、賃銀の占める割合の大小によつて定められると云ふやうな場合もあつたのである。資本をして、資本の威力を發揮させることの出来るものは、其處で働いてゐる人の勤勞であり、機械をして、その全能力を遺憾なく發揮させるものも亦、人の勤勞にのみ、かかかつてゐることが忘れられたのである。製品は機械が造る。勤勞は機械の働らきの補助の役目でしかないといふやう



に考へてゐる人が随分多いのである。併し、本當に、遺憾なく機械の能力を發揮せしめるものが、人間の働らき、勤勞であることを思ふ人が少いのは遺憾千萬なことである。勞務者諸君自らも、時としては、自分は機械の助けをするので、本當の仕事は機械がするのだと考へてゐる。さういふ人は、その仕事に於て樂しむことが出來ない。何時まで経つても、機械に追ひまわされてゐる。機械にこき使はれ追ひまはされて仕事をしてゐる人は、仕事に興味がないのみならず、その仕事こそ、その人には苦しみを與へるのである。機械は人間が使ふものである。機械をして眞にその能力を發揮せしめ、機械を使ひこなしして仕事をする、仕事し易く、仕事が愉快に出來、従つて益々努めはげむことになるのである。

然るに若し、今日の機械的な生産の仕事に於て、ここにいふやうな正しき勤勞觀が失はれると、勤勞の意志が萎靡し、生活欲求が低下し、仕事の單調さ、單純さから來る、心の苦難を克服する勇氣を失ふに至るから、勤勞はただ苦痛の體

験としてのみ行れることになり、勤勞は厭ふべきものとなる。そこで、人々は、常に、功利と打算との上のみ勤勞を行ひ、またその生活行動を律するに至り、その結果として、勤勞の目的は、自らの人生に向上をもたらすことではなく、ただ利益を得るにある。否、功利を得ることが、人生を向上することだと考へ、この考へに基づいて生活を律することになつて了ふのである。これがわが近い過去の時代に於ける、國民生活の弛緩の原因であり、恐るべき社會問題を勃發せしめた原因であつたのである。

正しく勤勞を體驗し、本當に、腹の底から勤勞の悦びを味つたものには、富めるもの、必ずしも仕合せでなく、また貧しいもの必ずしも不幸でないといふことが判るのである。財産や所得の大小によつて、人間の幸と不幸とが分れるのではなく、また貧乏と不幸とが常に共存するものでもないことが了解される筈である。富める者、貧しき者、その何れを問はず、その人が勤勞することに

よつて、その人の知が啓かれ、その人の性がみがかれ、一層に高き人間生活の展望をもち得ることになると、その人の人生は眞に向上したのである。これに氣がついた時、その人の人間の生活の悦びを味ひ得る。向上する人生に伴ふて、よりよき所得と社會的地位とが與へられ、その生活が安定する。そこにまた、第二段の、その人の仕合が待つてゐるのである。従つて今日、結成されてゐる産業報國運動の最も重要な目的の一つであるが、この意味に於ては、自らの勤勞によつて、自分自らを啓發し向上するためのものであることを十分に自覺しなくてはならない。而して單に自分一人ではなく、同僚と手を取り合ひ、同じ職場に働く人が、同じ志に結びつき、各々の人生の向上をめざして勤勞し、それによつて自らを啓發する、文化啓發の運動として理解せらるべきである。

### 三、生活の實踐

#### イ、發 奮

今、日本の當面してゐる事態に對して、吾等はいかなる生活の態度をもち、いかに行動すべきであるか。勤勞新體制の理念の下に展開されてゐる産業報國運動に於て、吾等は何をなすべきであるか。その一つの實行はいふまでもなく、生産力の高揚と云ふことである。生産力擴充の職場に於ける實踐とは何をいふのであるか、そしてその方法はどうすればよいのであるか。

第一は仕事場のことである。人間が仕事をしてゐるところには、仕事場のないところはない。織布工場にも、鑄物工場にも、機械工場にも、凡そ人間の仕事には仕事場がある。仕事をするには仕事場が最も大切である。従來の考へ方からすれば、事業主が賃銀を出して勞務者を雇つた。勞務者はその仕事場へ行つて、仕事をし、賃銀を貰つた。仕事場での仕事は賃銀となり、勞務者は賃銀に相當するだけの仕事をすればよい。賃銀以上の働らきをすることは、まつびらである。時とすると、事業主の方でも、賃銀に相當するだけの仕事をして貰

へばよいと考へ、勞務者の方でも、眞劍に、むきになつて、眞面目に働らく必要はないと考へてゐたのである。従つて仕事場は勞働を賣り、勞働を買ふといふやうな、お金のやり取りの場所になつてゐたのである。

産業報國の精神から云へば、仕事場は全然別個の意味をもつて來るのである。事業主は仕事場を以つて、國家に奉公するための事業を行ふ中心の場所であり、勞務者にとつては、その知を啓き、その徳を成就する場所となる。即ち事業主にとつても、勞務者にとつても、仕事場は、彼等の人生を向上させるための、人間の生活の中心、眞劍勝負としての生活活動の行はれるところである。のるか、そるかの分れ途が、仕事場の生活の中でさまるのである。即ち、仕事場の中で、事業主も勞務者も、國民として恥かしくない、立派な生活を行ひ、立派な行ひをしよう。それによつて、身を立て家を興さう。そして邦家と民生に御奉公しようといふのである。人生の向上といふことの中には、利益を得ようと

勤勞と文化

することも、賃銀を得ようといふ問題も含まれてゐるのであるが、それよりもつと重大なことは、仕事場の中で仕事をするることによつて、その人の知慧が啓かれ、その體力が強まり、その人格を向上して行くことである。またその仕事を通じて、變轉する國家的情勢に對處して、眞によく國民としての、よき政治的活動、即ち大政翼賛の生活活動を營んでゆかなければならぬ。從來のやうにただ賃銀や利益のみを目標にし、ただそれが得られればよいといふのでは、その知慧は啓かれず、その徳は積まれず、その體力や健康が強まらず、従つてその人の人格が低下し、人生は向上しない。産業報國精神を以つて貫ぬかれてゐる仕事場は、その仕事場で勤勞する全員が、業につき、その業にはげむことによつて、人となり、その人生を向上し、その生活を安定しなくてはならぬのである。さういふやうな仕事場を建設することを目標として、産業經營に協力してゆく、それが産業報國精神である。金さへ儲かればよいといふ仕事場へ行

勤勞と文化

つて見ると、仕事場が亂雑で不潔で不整頓で、仕事がしにくい。皆が苦勞して、汗水たらして仕事をして居て、而も仕事が進まない。たまたま仕事が進む場合でも、健康が悪化して病人が多く出る。品物は出来るが、經營者や勞務者の人間が下等で信賴がもてず、互に相愛惜し、勸勞しようとしなない。ただみんなが利益をのみ追つて行く、従つて利益はふんだんにあがるやうに見え、賃銀はよゝうに思はれるが、結局世間の信賴を勝ち得ることが出来ず、勞務者の間に、不健康なものが續出するために、經營者も勞務者も、本當に生活の安定が得られず、常に不安で落ちつきがないといふ状態である。

農村に行つて、よくつとめ、はげんでゐる農家をたづねて見るとよくわかる。家の中がよく整つてゐる。主人、主婦、子供、老人など一家全體の生活の様子が實になごやかである。仕事の中にはぐまれて生れた、極めて自然な、なごやかさである。併しその和やかさの中にも、どこか肩のこらない規律があり、

秩序があり、禮節がある。これらも決して教へられ、外からつけられた様子は微塵もない。私は、それはやはり農業といふ、自然の中、土とともに行はれる仕事の性質から來てゐると思ふ。かくてその家庭生活は、常に和氣靄々としてゐる。納屋も、畜舎も、臺所も、納戸も、よく手が行きとどいてゐる。農具はよく清掃され整備されてゐる。又吾々の見のがしてならぬことは、つとめはげみ、楽しんで農をいとなむ人の耕地は、あちら、こちらに、散在、交錯してゐる。一つまたは二つ三つなどの集團によく纏められてゐる。それは、その農夫が機會ある毎に、働きよいやう、仕事やし易いやうに、ばらばらに散在してゐた耕地を、永年の間に、一枚一枚、つぎつぎに纏めて來たためである。農業の方も、家の生活も、實によく整ひ、自家用の蔬菜も、よく心をくばつて作られ、且つ豊富である。

これに反して、はげみのない、つとめて農をいとなまない、怠惰な、經營の

よくない農家へ行つて見ると、家の中も、農具も、畜舎も、どこもかも、不潔で、不整頓で、亂雑である。納戸には繕くろい物や、洗濯物が山と積んである。臺所も便所も、床の間も、總てが雜然として、足の踏み入れ場もないほどである。一見して、農事が順調をかき、いつも手後れや、手違ひで仕事に追はれ、そのためにまた、家事も滞つてゐるといふ様子がありありとわかる。生活には禮節がなく、秩序がない。農業經營の方面を見ても家族の勞働力と作付の釣り合ひがとれてゐなかつたり、作付けがまづく、自家用蔬菜すら十分に作つてないといふ状態である。

農家は一戸一戸だから、その生活の様子や、その經營などは、少し注意して観ると、手にとるやうに、そのよしあしがわかり、その因つて來るところを知ることが出来るが、工業は經營が大きく、何百人、何千人と云ふ人が、一つの運營にあたつてゐるのであるから、その全體をつかむことは容易ではない。併

し私が、ここに農家について述べたことは、全體として工業にもよくあてはまるのである。

試みに、先づ工場を見學するがよい。よく心をくばり、みながつとめ、はげんで仕事をしてゐる工場へいつて見ると、事業主と勞務者との間が、いかにも親しさうである。隔てがない。親和があるがそれは決して、秩序を亂さない。上に居る人が下の人を愛惜し、つとめ、はげむ生活を尊び、つとめはげむ人を敬ふから、部下はそれにはげまされ、悦びを以つて勤勞に従ふ。あの人の爲なら、あの人の云はれることなら、何でもしよう、うんと力を出して働かなければならないといふ、經營者の愛情と信頼とに對して、勞務者は常に發奮を以つて仕事につとめる。この事業主の云ふ事さへ聞いてをれば、自分の腕は上る。自分の知識も、教養も高まつてゆく、従つて収入も増加し、生活も豊かになる。自分は誠に仕合せのものであるとすら考へるようになる。

かくなると、その経営内での凡ての勤勞は、最早單なる賃銀勘定や俸給のためではなくるのである。人はパンのみに生きるものではない。人は己を愛惜し、己を啓發してくれる人のために、また信賴を以つて對してくれる人の爲に、悦んでその指導に服し、その人と共に生きるのである。人生意氣に感ずといふことがあるが、志を同じくし、意氣に感じあつた人々は、その志に於て相結び、相たすけ、相協力して、その任務とする職場の仕事を遂行することによつて、各々、自らの人生を高め、人間生活の眞味に浸つてゆく。そこに發奮が生れ、その發奮によつて、更に一段と、廣い深い人生がひらかれて來るのである。

勞務者は賃銀のために働らきつつあるものである。賃銀さへやつてをればいいといふのは人生を知らない人の云ふことである。人生向上のためになされる人の心の啓發が、いかに、人をして、その能力を高めしめ、その働らきのねうちを向上し、その生活を見違へるほどよくするものであるかを知らない人は、

事業の經營者にはなれないのである。金の勘定が出來、資本の運轉が出來、工場の經理が出來ても、人生のわからない人は、指導者たるの資格はない。勞務者を賃銀とりの人としてではなく、人生に旅し、人生向上を念願する人とし、國民の任務遂行者とし、人格として觀、これに遇することによつて、勞務者は始めて、經營主の同志となり、愛すべき敬すべき、部下となる。かく待遇せられ、かくの如く知られて、勞務者はその心に發奮する。發奮以つてその事業にはげむに至る。

今や、人々は、仕事場は國民の生活力を養ひ、國民の人格を鍛鍊、培育し、その人生の向上を促がす場所であるといふ理念の上に立たねばならない。かくしてこそ始めて人は、人格活動のしるしとしての生産力を高めるために、その作業條件を改善し、凡ての勞働條件を革新すべきであるといふ國家的義務の履行に勇氣づけられ、あらゆる難關を突破して、それを敢行し、よき仕事場を建

設することが出来るのである。

ひかし葉公といふ齊の國の王様が、孔子の弟子の子路に向つて「一體、お前の師匠の孔子とはどんな人か」と人物批評を求めた。子路は先生の人物批評を弟子がすべきではないと思つたのであらう、遠慮して答へなかつた。「葉公、孔子を子路に問ふ。子路對へず」と論語にある。後になつて、子路が孔子に會つた時、「實は此間、葉公から、あなたの人物を問はれましたが、私はお答へしなかつた」と話した。すると孔子曰く、「孔子と云ふ男は、發奮以つて食を忘れ、楽しんで憂を忘れ、老の將に到らんとするを知らない。孔子とはかかる人間であるとなぜお前は答へなかつたのだ」と、子路をたしなめた。即ち、人生に志して發奮し、發奮して食をとる事も忘れて、つとめてゐる人である。生活上に起つてくるいろいろな憂や不安は、一意、人生を向上するはげみと努力のためにすつかり消されて了ふ。かくの如く、日々勤め勵んでゐる間に、いつの

勤 勞 と 文 化

勤 勞 と 文 化

間にか年月がたつてゆく、年をとることなど忘れてゐる。孔子といふ男は、かういふ男だ、となぜお前はいはなかつたのだ、と云ふのである。孔子の人生觀の核心は發奮し、勤勞し、以つて人生を向上することである。業につき、發奮して食を忘る。どんどん仕事が進む、あらゆる難關を突破する。仕事が進み難關を突破するに従つて、仕事が面白くなり、生活展望がひらかれる。人生が高まり、生活が安定する。生産力の擴充も、この戦法でゆかなければならない。即ち事業主も勞務者も、凡てが發奮して事にあたりなくては、事業は遂行出来ないものである。

ロ、工夫と創造

生産力擴充を遂行する第二の方法は、仕事に於て工夫し、仕事に於て創造することである。これがためには、先づ生活と仕事との兩方面に互つて、工夫と創造とを加へねばならない。人は努めてよく時間を活用し、時間を惜しまねば

ならない。多くの人は、ただ労働時間さへ長くすれば、一層に多くの仕事が出るものと考へてゐる。それは間違つてゐる。人が仕事の始まりと同様な新鮮な態度で、一日中、その仕事に従事することが出来るやうな、労働時間の長さ方がいいのである。また一日の就業時間中を通じて、倦むことなく、仕事に従ふことが出来るやうに、適度の休養をとり、仕事の合間々々には一息入れて、元氣をとりもどして、次の仕事にかかつてゆく、この呼吸をのみこむためにも、工夫が必要であり、生活の創造が必要なのである。午前の仕事に比して、午後

の仕事には、不良品がうんと多くなつたり、仕事の量が著しく減じ、疲勞が加はつて意氣が衰へ、仕事の興味がなくなるといふやうな、労働時間の使ひ方や仕事の仕方は、各々の工夫によつて改善されねばならぬのである。また一日の労働の爲には、一夜の快眠を持ち、一夜の快眠に明けた翌朝には、更に新たな希望を以つて仕事と人生とに出發し、潑刺たる意氣を以つて仕事に従事する。

一日一日が新生活の實現であり、生命の創造を意味するのである。

勞務者が、来る日も来る日も、潑刺たる元氣を以つて、新鮮な状態で勤務するためには、長過ぎる労働時間は有効な生活方法でなく、生産力を擴充する途でもない。仕事をだらだらとしないで、仕事のための時間は、これを工夫によつて出来るだけ短くする。かくして生み出された餘裕時間は、更に仕事のために、或は教養を高めるため、よき休養のために活用する。これが仕事の工夫であり、工夫ある創造の生活である。

生産力擴充と云ひ、高度國防國家の建設と云ふも、資材や、動力や機械や、産業資金があつても、その實現は不可能である。勿論これに國民の勤務が、資材を活かし、動力や機械を驅使して、よくその目的を完遂し得るものであるが、その勤務それ自身も亦、ただの労働、機械のやうに働くのではなくして、日々生々として發展する、豊かなる生命力をもつたものでなくてはならない。かく



の如き勤勞は、勤勞する人その人の、人生が向上しなくては望み得ないと思ふのである。

また今吾々は大陸に於て、古今未曾有の大戦争をしてゐるのである。戦争は巨大なる物資の消耗を伴ふものである。物資が不足するのも、資材が足りないといふのも、一に戦争をしてゐるからである。戦争に捷つ爲には、この資材の不足に堪へ、國民があげて資材を惜しみ、資材をよく活用し、いやしくも浪費しないことにならねばならない。これを仕事の上に實現することである。即ち最少量の材料を以つて、最も優良な製品を造り上げることは、資材不足を克服する賢明なる方法であることが、よく了解せられ、仕事の仕方、材料の使ひ方が改善せられなくてはならない。

また生活方面に於ても、食糧や衣料、燃料、さうした生活必需品の消費につきても、一層の工夫を以つて、時局に對處して行くべきである。それには根本

は工夫し、創意することである。即ち人智を高め、品性を養ふてかからねば、生活の新設計は不可能なのである。人生の向上をはかることが、工夫し、創造し得る能力を高め、その實力を養ひ得ることなのである。

また今日の重大な問題の一つは勞力の不足である。家庭の中にも勞力が足りない。工場にも、農村にも、内地も朝鮮も滿洲も、否、東亞に、世界に、勞力は不足してゐる。勞力問題はまさに世界的な問題である。今日は勞力を外に求める時代ではない。勞力を外に求めても、いたるところ勞力は不足してゐるのである。勞力不足の對策の最も大切な點は、内に勞力を求めることである。一人一人のもつてゐる勞力を、一層に高め、強力な、良質のものにすること、一人一人の勤勞のねうちを全體的に高めることが、勞力不足時代の勞力對策である。これがためには、各人が工夫を以つて仕事に處し、生活を築いてゆくより他に途はない。工夫を以つて、その能力を生かして使ふ。従前よりも一層によい

製品を、多量に造るやうに工夫する。それには仕事の仕方を考へ、仕事のし易いやう、仕方が樂に出来るのみならず、出来上りもいいといふやうに、仕事の仕方を改善しなくてはならぬ。機械の据ゑ方、機械の使ひ方は勿論機械の保全にも一層に心をくばつてゆく、その上に向、材料を粗末にしないやう、材料の最小の損耗で製品を造りあげる工夫が必要である。材料を活かして使ふ、材料の損耗を極度に少くすることは、資源愛護の最善の方法である。

生活の時間をよく活用し、自らの勞力を惜しみ、仕事の仕方を工夫し、資材を活用する勞務者こそ、時局をその双肩に擔ふ資格と實力とをもつ人である。その人はただ賃金取りのために、また勘定づくで働いてゐる人ではない。彼こそ、その人の人生を向上しようと云ふ志の厚い人である。その生活に於て、志を立て、人生の向上のために、不斷に健闘してゐる、恪勤、勉勵の人である。仕事に於て、常にその人生の向上を體得してゐる勞務者でなくては、かかる仕事

の仕振りは出来ないのである。その人格が向上し、人生全體が向上しなくては、仕事の仕振りはよくなるはず、仕事の能率は高まらないのである。勞働は人格活動である。人格が向上すればするほど、その勞務者は、時間を活用し、機械を活用し、資材を活用し、勞力を活用して、その仕事の成果をあげてゆくのである。今國家の要望してゐる生産力擴充は、かくの如き、人格活動としての勞働の出現に對する要望であり、人格者たり、品位ある、そして名實ともに、國運打解の實力ある勞務者の排出にあると思ふ。

ハ、愛情——技術水準の向上

生産力擴充を強力に進めてゆくためには、人は互に愛惜しなくてはならない。同志といふ言葉がある。この言葉は「志を同じくするもの」といふ意味ではあるが、ただそれだけではなく、志を同じうするものが互に愛惜し、一つの目的に向つて心命をかけて進むことだと思ふ。互に愛惜して、その健康を護り、體

力を練り、知識を深め、その技術を磨くのである。かくてこそ、志を同じくするものの技術水準を高めることが可能である。志において結びつかず、職場に於て互に愛惜し、勤勞し、切磋琢磨しようとしなない人が、どうして日本の技術水準を高めることが出来ようか。

一人々々の發奮によらねばならぬが、一人だけではだめである。また一人一人が別々に、氣儘勝手にふるまつてゐてもだめである。先づ隣保相ひきあひ、相寄り扶けて、技を練り、術をよくすることにやらねばならぬ。即ち産業報國運動の實踐としての、技術水準の向上には、愛惜し、勉勵することが極めて大切なことである。一つの職場、一つの工場に、この氣風が旺んに興らねばならぬ。更にそれが、一つの地方、同種の工場全體まで擴げられねばならぬ。

わが國民のもつてゐる最高の技術水準にまで、凡ての人の技術が向上しなくてはならぬ。低い技術をもつてゐる人は、常に高い技術をもつてゐる人から愛

惜せられ、指導せられる。高い技術の所有者や、また生活に於て一段と高い文化をもつてゐる人々は、低い技術層、低い文化層を指導向上する責任を自覺し、自己を啓發しつつ、常にその實力を以つて彼等を指導し、彼等を愛惜するのである。

技術は、自分が多年苦心經營の結果として得たものである。これをむざむざ人に知らせてたまるものかといふやうな考へをもつてゐる人がまだ随分多くゐるのであるが、それは同志的な愛惜感をもたない人である。自分も人から導かれ教へられたといふことを自覺しない、鼻つまみものである。かういふ人は、えて、ただ自分一個の利益だけあがればよいといふ考へで生活してゐる人で、この種の人には、それ以上の技術的の進歩がない。またかかる人のもつてゐる技術、かかる鎖國的思想の上に運營されてゐる工場の技術は、資本主義、營利一點張りの經營と隣り合つてゐるから、國家の興隆と國民の福利を増すのに

役立たない。自分だけよければよいといふ孤立的な功利主義には、國民と同僚とを愛惜する思想はないのである。人と共に、同僚とともに、同業とともに、一人残らず、といふのが愛惜である。これに反して、自己利益主義は利益さへあればいいのであるから、利益をうるといふ目的が達せられればよいのである。科學や技術は孤立的な立場からは進歩しない。科學の進歩も、技術の向上も、常に協力から生れてくる。「徳孤ならず、必ず隣あり」と云ふ言葉は、眞知としての科學と、その實踐としての技術にも亦、あてはまることである。科學の道に進むものにも、技術に志すものにも、善友があり、この善友と知己とが、心を一つにして、眞理を求め、技術の確立に努力して、人類の文化の更にはるかなる發展に力を注いでゆくのである。科學者も技術者も、或は産業の最前線において勤勞に従事する勞務者も、互に愛惜して、善友となり、同志となつて行動して、始めて技術水準の向上が達せられるのである。

#### 四、生産機械と人生

物を切るのも、砕くのも、割るのも、削るのも、人間は、もともと、自らの身體の部分を以つてやつたのである。即ち、齒や爪や指や手足などが工具であつたのである。然るに漸次に人間の知識が進み、文化が發達するにつれて、人間はこれら自らの身體の工具に代ふるに、一層銳利で、能率のよい工具を、工夫し、案出したのである。

かくて先づ、いろいろの石器が出來た。石の刀、石の鑿、石の槌が出來たのである。石器時代と云ふのはこの時代のことである。更に人智が進み、文化が啓けると、鐵の道具の時代が來た。かくの如き、人間の工具の歴史を通じて、今日の生産機械を考へると、元來人間の工具は、その手足であつた。次いで出來た石器、鐵器は、その本質に於て、人間の手足の延長であり、人間の身體の一部分である。従つて、工具の歴史は人間の能力の發達の歴史であり、その文

化の發達の歴史の表徴であると云つてよいのである。

吾々は工具とその發達の歴史のなかに、人間の勤勞と、人間の勤勞意志と、勤勞する人間の精神とをみる事が出来るのである。今から三百年前、自然科学の發達につれて、生産技術の上に著しい變化が起つた。それは動力の發見である。人間は、人間自身の力と自然力との外に、人工的に巨大なる力の源泉をさぐりあて、これを生活上の必要に利用する方法を發見した。即ち、蒸氣機關の發明に始り、ついでは電氣的動力、更に進んでは重油燃料による一層に能率のよい發動機などが、次々に發明せられ、これらの動力の利用が、科學の進歩と相伴つて、大機械による生産技術の發達の時代を招來したのである。

例へば織物は、わが日本に於ては、明治の中期までは、多くは家庭内で手織によつて行はれた。人間が織り道具を使つて、布を織つたのである。手織は正しく人間の手足のはたらきの一部であつて、これを自由自在に人間が使ひこな

してゐたのである。然るに紡織機械が輸入せられ、それが更に發達して、自動織機の時代がくると、人々の考へは變つた。即ち、布は機械が織るのであつて、人間はただ、その自ら働く機械の番さへしてゐればよいのだといふやうに考へるやうになつた。生産することは、機械が主人で、人間は従になつた。工具としての手織の時代には、人間が主人で、機械は人間の從屬物であつたのであるが、機械の發達につれて、この人間と機械との主從關係が全然逆かさまになつてしまつたのである。

機械さへうごいてゐれば、生産は出来るのだから、機械の能力のありたけを出させて、思ふ存分に機械に廻轉をつけて、仕事をさせる。人間はその廻轉する機械の速度を追ひかけてゆく。いつも機械にせき立てられ、追ひかけられ、苦しめられて仕事をした。これが明治時代の紡績に働いた婦人達の有様であつた。機械の能力をもとにして、人間に仕事を強制したのである。その爲に、多

くの婦人が、その母性を枯らし、健康を犠牲にした。機械的生産方法は、多量生産方法であつたが、人間をいたため、生活力を萎靡せしめ、生活力を低下させた。けれども人々は機械の力に眩惑せられ、機械の力によつて富のみを得ることに専心したのである。そこに間違があつたのである。當時、紡績工場から澤山の肺結核が出た。その肺結核患者が農村へ歸つて、今日、吾々が見るやうに、工場で発生した結核を、農村へぶち播いて、わが國民中に、肺結核が全面的に蔓延し、國民の體力をついばみ、國民生活の中に正しい勤勞人生觀が失はれる動因となつたのである。

生産するためには、機械は勿論大切なのである。併し生産するためには、人間は、その補助役でしかないといふ考へが間違つてゐるのである。さういふ考への上になつて運営されてゐる工場で、機械の傍に立ち、機械を使つて働いてゐる勞務者は、その機械に親しみが起らないのである。親しみが無いのみなら

ず、生産機械と共にゐること、機械についてゐることが、生活の苦痛となるのである。業に於て楽しむことが出来なくなるのである。即ち現代の機械工業の多くのところでは、機械は人間の身體の一部分であり、人間の働らさを補ひ、これを強化し、人間の能力を向上させるものであるといふことが全然、忘れられて了つたのである。機械は人間を苦しめ、人間をかりたて、人間を壓迫するものである。従つて工場を出て、機械から離れた時に、人間は苦痛の生活から解放せられ、楽しい時、愉快な時をもつといふ、考へが成立するのである。機械と共にある時は、苦痛の人生、機械から離れてゐる時が、悦びのある人生となる。それ故に、機械に親しみがなく、機械を尊重せず、機械に愛着を感じず、勤勞を欲せず、仕事を厭ふのである。かくて機械的生産に従事する勞務者は、その仕事に於ける工夫と創造力とを失ひ、その勤勞の人格性を失落し、生活力を低下し、生活内容は貧困化する。これが資本主義生産組織に於ける生産能率

の向上しなす一つの原因であ

勞務者を、その人格に於て培はず、その人生を向上させようとしなす工場へ行つてみると、今、私が上に述べた通りの状態がすぐに眼につく。その上に、機械は埃だらけで、運轉狀況も悪い能率の悪い機械が、一ぱいに運轉がかけられてゐる。かかる仕事場での労働は働きにくく、勞多くして、效は上らず、人間も機械も酷使せられて、生産力が極めて低いのが常である。

日本刀は武士の武器である。敵に備へ、敵を征服する工具の一種である。わが武士道に於ては、日本刀を、武人の精神としてこれを尊重した。武士はその刀をみることに、あだかも己が身體をみる如く、またその精神をみる如くである。武士は自己の品性、自己の人格の示現として、日本刀を尊び、これを大切にしたのである。日本武士道における、この武器尊重、兵器尊重の觀念は、生産に於ける、仕事に於ける、工具尊重の觀念と一脈の相通するものがある。この工

具尊重、機械尊重の觀念を、現代の機械的生産活動の中に築き上げる必要がある。機械とその働らきをば、勞務者の人格的活動のあらはれとしてみ、またその人格的活動を充足するものとする、工具本來の面目に立ち還らしめねばならない。即ち、機械的生産手段における機械とその働らきの中に、人格性を復興するところ、産業報國運動の實踐の重要なる方向の一つである。この實行において、始めて工場は清潔、整頓され、機械の保全がよくなり、機械運轉は、人間の生理的にして、且つ心理的なる働らきの限度に保たれ、人間の精神が、機械の働らきにのりうつり、従つて機械の能率は高められ生産は高揚せられる。ここに至つて、機械の重壓下に苦しめられて萎微してゐた人間の能力は始めてよく伸び、精神のはたらきは高まり、人間は機械を統理し、無味乾燥なる機械的生産手段の中に、勤勞の悦びを克ち得、ここに於て、機械的生産手段は、嘗つての人間生活を貧困化するものといふ汚名をぬぐひ去つて、人間の文化に高らかな

る、そして誇るべき凱歌をもたらし得るのである。

生産をあげるためにのみ、機械を運轉し、製品を出来るだけ多量につくり、利益を上げることだけを目的として經營されてゐる工場では、人間はただ心せはしく、機械的に働かされ、身も心も過勞し、健康は悪くなり、一時は能率も上り、利益も得られるが、永くはつづかない。勤勞能力は結局に於ては萎んでしまふ。従つて勞務者の生活は本當に安定しない。いつも不安にかられてゐるから、遂には勤勞を厭ひ、勤勞しなくなる。さういふ工場では、缺勤率や疾病率が高くなる。また生活に安定がないから、勞務者の移動も多くなる。かくの如くであつては、決して生産力の擴充は出来ない。技術水準は向上しないのみか、反對に引き下げられる。打破すべきは資本主義的功利的經營である。

##### 五、生産組織の整備確立

工場經營の根本は、人である。人の勤勞である。生産を高め、産業を興隆す

る根本は人の働らきである。従つて勞務者を人格として待遇し、その人生を向上し、これによき、強力なる、そして懇切なる指導を以つて臨み、その腕に磨きをかけしめ、その生活によりどころあらしめることが肝要である。かくしてこそ勞務者は、彼の指導者たる經營者の誠意に感動し、彼は經營者に協力する人となる。事業經營の根本は、人を育て、人に國民としての最善の資格を與へ、その生活を培ふにある。即ち、所謂能率の向上は、人間の教養を高め、勞務者の人格を向上することから始めなくてはならない。

また工場に於ける生産力擴充の遂行上、最も大切なる要件は、經營内に於ける關係者の全部が、上下の別なく、その職責の如何を問はず、凡て正しいものに頭を下げ、正しいものに道をあげ、正しい道理に従ひ、これを尊ぶといふ嚴肅なる習俗が樹立されることである。先輩の指導に、後輩が信頼を以つて従ひ、先輩は後輩に對して責任をもつて、その生活を愛惜することである。仕事場の



集團の中に、長幼の序が確立され、先輩と後輩との間に、親和と信頼が確立せられ、常に、秩序が重んぜられ、禮節を尊ぶ習俗が、勤勞の生活とその組織の中に生み出されねばならない。一致協力とか、打つて一丸となつて進むといふのは、このことである。この精神を以つて一つの職場が相結ばれ、一つの工場が貫かれ、それがその地方の産業の協力を喚び起し、これに基づいて日本全國の工業の協力が生れ、ここに、生産力の擴充が強力に實現されるのである。

今吾々の望んでやまぬことは勤勞を以つて奉公する、また奉公することの出来る最善の組織の完成である。この組織を確立するためには、嘗つての協調といふやうな考へでなく、また相談し合つて歩調を合せるといふやうなものでもなく、妥協や慣れ合ひで行くのではない。組織の中にある全員が、みな志を立て、志を一つにするのである。正しさを養ひ、正しいものに従ひ、正しい者に道をあげ、正しいものに指導され、そして最後には、わが國民の中にある最高

至善の理念に順ふことである。否それに順ふことの光榮と榮譽とを自覺することである。それは、取りも直さず、肇國の精神において、組織が基礎づけられ、事業が運営せられることである。

# 戦時生活体制の根本動力としての勤勞

## 一、志

化 文 と 勞 勤

いかなる事態に立ちいたらうとも、國民の生活が磐石の大地の上に、常にはちされんばかりの活力を具現し、而も秩序と、禮讓と、そして、出来る限りの高い文化的、經濟的、政治的水準に、確保されてゐることは、新らしい政治の最も望ましい具體的な目標であると同時に、それがまた、とりも直さず、戦時國家の國民生活の、最も強固なる體制であると思ふ。

かかる國民生活の態様は、東亞に、否世界に新たなる秩序を創造しようと思志する國民にとつては、誠に必然のことであつて、これなくては、國民の意志を、

戦時生活体制の根本動力としての勤勞

またそのはるかなる志望を達成することは到底不可能であると思ふ。私はかかる國民生活の態様が、國民の總力を動員して行はれる戦時國家の國民生活に普ねく行き互らねばならぬと考へてゐるのである。都市に、農山漁村に、工場に、鑛炭山に、商店に、そこに勤勞し、奉公する凡ての國民の生活に、それが具象されることに努力することが、新生活体制の要諦だと考へてゐるのである。

この新らしい政治の要諦の發起を促すものは、勿論、新たなる政治力である。併しこの政治力は従來のやうに、固定化した政治組織——政治の機構にあるのではなくして、國民各個の生活の中に發現し、それが全體として結びつくことによつて、全國民的なものになり發展すべきものと思ふ。私はその國民各個の生活の中に發起し、全國民的に結びつく、新らしい政治の根本原動力を、「志」と呼ぶのである。「官武一途、庶民ニ至ルマデ、各々其志ヲ遂ゲ、人心ヲシテ

倦マザラシメンコトヲ要ス」と云ふ 明治大帝の五ヶ條の御誓文は、國民に對する生活態度を明示せられたものであつて、ここにいふ「志」のことだと云つてよいのだと思ふ。われわれはこの重大時局に、一念發起するのである。「志」を内に發して、正定受の位に入るのである。この正定受の位置に腹がすわつて來なくては、一念發起したのではないのである。個々の國民が正しく國民として、皇民としての地位を享け、それを自覺することなくしては、新らしい政治は生れて來ないと思ふ。新政治體制はかくて國民自らの、生活の中に發起する「志」によつて定まるものだと思ふ。

勤勞能力の遺憾なき發揚も、生産力の擴充強化も、高度國防國家の建設も、あけて、この「志」——一念の發起にかかつてゐる。科學と技術の振興も、一念發起しなくてはだめなのである。自由主義に浸透され、功利的に職業的に獨

善的にのみ終始し來つた、研究者の生活それ自身が改變されて來なくつては、科學の振興は出來ないのである。私は生活の革命を通ずるにあらずんば、科學の振興は不可能だと云ふのである。すばらしい科學的創見や、驚異すべき技術の創造は、生活の革命をその前提要件とするのである。事實に於て、科學は理論體系や研究方法の進歩によるよりも、一層に、研究者の研究の態度——研究者の生活を裏づけてゐる信念によつて進歩して來たのである。全力をあげて、全生活をうち込んで、名利をけとばし、生死の巖頭に、精進しつづけた人々によつて、初めて劃期的な科學と技術との振興が遂げられて來たのである。ただそこらにゐる人々をあつめて、委員會をつくつたり研究會議を開いてみても、科學技術との飛躍的振興は望むべくもないと思ふ。

生産的仕事場に勤勞する、産業前線の勞務者達を觀るがよい。彼等は正に志

事が満足にしたいのである。快心の働らきがしたいのである。思ひ切り、自らの腕がふるつてみたいのである。あらゆる苦難を突破して、ただひたすらに習ひ、その道にいそしむことが、彼の御奉公だと、ほんたうに自覚してゐるのである。青年が新体制の推進力にならなくてはならないと云ふことは、かかる青年と膝を交へて語つてみると、何人にも直ちにわかることである。

志を立て郷關を出て来た仕事場の青年の、かくの如き志を伸ばすことが、生産力擴充の根本なのである。學び修めようとする意志、生きようとする意志、身を立てようとする意志、それが職場に働らく青年の志なのである。私はこの志を單なる一人の青年の志だとは、思へないのである。それは正に國民の志、國民的志操であると思ふ。彼等は彼等の生活の全體、その悦び、その苦痛、その努力奮勵の生活の全部をあげて、時局下の御奉公の生活だと自覺してゐるので

を立てて、郷關を出て来たのである。私は、最近ある機械工場に労働する青年二十餘人と懇談し、彼等の話をさく機会をもつたのである。彼等は志を立てて仕事場に來てゐるのである。「國を出る時に、おやぢはみつちり苦勞して來いと云ひました。そのおやぢの言葉が身にしみてゐる」と、ある青年は云つたのである。仕事場で、上役の人が、どうしても仕事のことを腹にはまるほど懇切に教へてくれない。仕事がつくりと腹に入らない。なんとかしてそいつを仕上げねばならない。いそがしいせゐもあらうが、訊ねても、教へてくれない。ぢつくりと腰をすゑて、自ら工夫をこらさねばならない。道はそこに開かれて來ると、彼等の一人は叫んだのである。國を出るとき、おやぢが、「苦勞して來」と云つたのは、ここだ。この辛抱だと思つて、身にふりかかるあらゆる難關を突破して働らいてゐると云ふのである。彼等青年の語るところは實に純粹である。金がほしいのでもない。名譽や地位がほしいのでもない。ただ仕

ある。それは一念發起してゐるからである。その志が、彼等の心の中に、もえさかつてゐるからである。生産力の擴充、高度國防國家の建設等、時局の國民に要請するところの凡てのことは、この志から始まるのでなければ、本物ではないのである。「志」が青年の生活の全面を貫いてゐるのである。宿舍に於ける生活にも、職場の生産的行動にも、交友にも、その全面に、志がその翼をのばしてゐるのである。「志」を中心に、職場の青年の生活が動いてゆくのである。宿舍にあつては、身を立て、家を興す志である。職場に於ては、旺んなる労働意志であり、學修の志望である。一つの志から、二つの青年の態度が出て來るのである。重大なる時局にあつては、時局に對處する態度となり、平時にはそれが、處世の態度となるのであると思ふ。

青年のかくの如き「志」に基づく生活活動は、これを伸びるだけ、すくすく

と正しく伸ばさねばならない。その志をよく培ひ、よく伸ばすことが、新體制の最も重要な基本でなくてはならない。「志」をもつ人の本然の姿は、生活の保證にあるのではない。最高の名譽の獲得にあるでもない。最高の社會的地位にもあるのではない。ただひたすらに、伸び且つ強く正しく生きようとする、日本青年の本然の意欲である。

新體制に於ては、いたづらに右顧左眄することは許されないと思ふ。この國民的志操に立つて生活し行動する、純乎たる青年の志を目標に、それを具體的な現實的な對象として、凡ての體制が整へられ、基礎づけらるべきであると思ふ。統制經濟の強行も、利潤統制も、そしてあらゆる艱苦と缺乏に全國民が堪へてゆくべく決意するのも、科學と技術を總動員するのも、凡てこの青年に宿り、青年の中に伸びる、國民的志操の強大なる發展に絶大なる希望をもつから

である。青年の中に宿るこの國民的志操が、發して萬朶の櫻となるのである。統制經濟の強行のもとに、青年のなかから新たな經濟觀が生み出されて來るのである。物資の缺乏に對處する生活態度が創造されて來るのも、青年の志操からである。科學と技術の總動員は、青年の志操に刺戟を與へ、彼等を科學的に技術的に啓發することによつて、わが日本の科學技術水準が向上する、本質的な機縁が生成されるのである。私はこれを新體制に期待してゐるのである。かくの如くにして、志を發起したる青年は、先づ自己を發見し、社會を觀、國家を認識し、そこに日本文化を回顧展望し、更に世界を凝視することによつて、彼等の心の中に、不動の世界觀を確立し得るにいたるのである。日本の文化が世界に支配力をもつのはこの時だと思ふ。

私は以上、青年の志を問題としてとりあげて來たのであるが、それはわが戰時國民生活體制の動向に關して、心ひそかに憂ふところがあるからである。

人間——國民の働らきを問題とし、目標としつつも、極めて觀念的であつたり、人間——國民を「物」を取扱ふやうにも見えたりするからである。それではならないと思ふ。新體制は根本的に、「物」から「人」への政治體系の建て直しに歸するのだと思ふ。

## 二、國民の最高の榮譽

今日は國家が全力をあげて民力を育て伸ばす時代である。この仕事のため、この政治のためには、今日は絶好の、誠に千載一遇の時局である。あらゆる國家當面の問題は、この角度から考へ直し、この立場から出發せらるべきだと思ふ。

物は人が作るものである。物にねうちを附與するのは人間の働らきなのである。だから物を造り、物を欲し、物の價值を高めようとするならば、先づ人間を作らなくてはならないのである。國民に一層に高い、豊かなる教養を與へること

である。知性を高め、體力を練磨し、その徳性を向上することが、今日ほど緊要とされる時代はないと思ふ。知性を高めることによつて、混迷を排除する力を得、體力の練磨によつて、その意志を強め、徳性の向上によつて、生活の態度を樹立するのである。かくしてそこに國民の職能は初めて遺憾なく發揮出来るのである。

巷に勤勞し、職場に行動する多くの國民大衆に對しては、未だこの點に於て、大なる遺憾があると思ふ。國民の凡てに、國民のもつてゐる最高の文化を普ねからしめねばならない。わが國民がその努力によつて創り上げて來た文化財産の全部が、生きんとする國民の生活意欲の前に、その思ふままなる撰擇攝取にゆだねられねばならないのである。それは封建治下に於ては、「倚らしむべし、知らしむべからず」といふ壓制の下にさまざまげられてゐたのである。功利主義の支配した時代に於ては、國民のもつ最高の文化は、一部分の國民の生活のな

かにのみ専有され、大多數の國民は、それにふれることなしに、國民的文化の下積みとなつて生活して來たのである。

國民の最高の名譽は、地位や、人爵や、物的財産にあるのではない。國民の悦び、國民の名譽は、その國民が創り出した、最高の文化水準を、常にその生活の基調とし、生活の内容とし、生活の力源として得てゐるといふ、自覺であると思ふ。それがまた國民を育て強める唯一の方途でもある。

農村の新體制、産業報國運動、科學振興、高度國防國家の建設等、凡て今、わが國民の當面してゐる事項についての政治的方策は、一つにこの目標に於て、その最も輝かしい成果を收め得ると思ふ。即ち國民がその國民の創造した最高の文化に浴してゐると云ふ自覺に於て、ここに醸成されて來るものは、滾々として盡くるところのない國民の生活力である。この國民最高の榮譽に於て、民力の源泉が培はれるのである。國民生活は、模倣から創造へ、混亂から秩序へ、

禮節へ、そして最後に、自らの意志と努力によつての、自らの生活の確立がなし遂げられてゆくのである。この榮譽によつて、國民的自覺に立つ、獨立者としての人格の生成が促されるのである。

新體制における國民の生活確保の理念は、根本的には、生活の物的要件にのみかかつてゐるのでない。それは上述するやうな最高の國民的榮譽によつての、國民的人格の生成にかかつてゐると私は信じてゐるのである。

この國民的人格の生成に對して、あらゆる物的要件を整へるのである。生活の確保のための物的要件は、食つて、着て、寝るための要件ではなくして、國民的人格の生成と、その活動とに違算なからしめるためなのである。

凡ての保護政策は、かくて人格的行動の振作のための積極政策となるのである。嘗つて網の目のやうに國民生活の全面に張りめぐらされた法令によつての、監督行政は一蹴されて、國民的志操の盛んなる變動を喚び起すことによつての、

自主獨往の生活行動を振作し、その機能の發揚を可能ならしめる指導啓發の行政に轉化するのである。社會政策はその嘗つてありしが如き、唯物的觀念を一掃して、國民的人格行動を支持し、それを強化することに集中されて來ると思ふ。

### 三 國運を開拓する動力

國民的人格の生々たる發展は、わが國民が東亞に、世界に、その志を伸ばすことを可能ならしめるところの原動力である。邦土に生活し、その最高の文化水準をほしのままに攝受し得たる國民は、四方にその榮譽を分ち、その悦びを普ねからしめる力をもつに到ると思ふ。この力によつて、半島の同胞と、滿腔の信頼と愛好を以つて結びつき、そこに民族的、國民的勤勞能力の結成を成立せしめ、興亞の大業に邁進するのである。われらはまた北滿の廣野を開拓して沃野となし、そこに新たな文化を建設することが出来るのである。今や吾々は、日本の農村問題の解決のために、耕地なきわが貧農の前になげ與へられたる、



生活の本據としての満洲開拓といふやうな、どちらかと云へば、窮通の方策としての開拓政策といふ、初期の觀念を離脱すべき時だと思ふ。内にかち得たる榮譽を擔つて、かの廣野に、三千萬の原住民族を率ゐて、新文化の建設の仕事に従事するのである。即ち満洲の開拓のためにも、わが農村の文化は一層に高められなくてはならぬのである。満洲開拓の動力は半ば盲目的なる耕地の所有慾にかけられてはならないのである。最高の國民的文化を攝受することによつての、農民的人格行動の發揚こそ、その根本動力であり、開拓の指導精神でなくてはならないのである。

わが開拓農民をして、五族をひきゐて、満洲の開発と建設を可能ならしめる方途は、これを外にしてはないのである。この意味に於て、新體制下に於ては、満洲開拓には正に重大なる一轉化が期待せられねばならぬと思ふ。

人々はまた支那事變と新體制との關聯について、深く慮かつてゐる如くであ

る。私は内に、國民が最高の榮譽を攝受することによつて、そこに國民的資質が發揮せられ、人格活動が潑刺として、その尊嚴を現示しなくては、どうしてこの大事業がなし遂げ得るだらうかと思ふ。内に得たるこの榮譽の悦びを以つて、そしてそこに湧出する國民的志望を以つて、四億の民衆にこれを分ち、その悦びと志望とを共にするのでなくては、東亞の生存圏の新秩序は樹立し得られないと思ふ。新らしい東亞の秩序は、支那の物資や資源に根本的にかかつてゐるのではない。四億の民衆の生活力の發揚にかかつてゐるのである。資源に乗つかるのではなく、その生活力に乗つかるのである。生活力に於て、がつちりと結びつく時に、東亞の新秩序のゆるぎなき基礎は初めて成ると思ふ。

また、想ひを遠く南方の太平洋にそそぐことも、われらの志望の一つである。そこには、暑熱のために、また生活の安易のために、たえて久しく墮眠をむさぼる未開、半開の民族がゐるのである。彼等も亦、今われわれの生活圏内に入

らうとしてゐることを知つてゐる。

石油、ゴム、米、それらの凡ての生産は、わが國民生活、東亞の諸民族の生活のために、確保せられねばならないことは勿論であるが、暑熱に眠れる彼等をよび醒まし、彼等の生活の意欲を振作し、資源の開発に協同せしめることは、われらに與へられたる最も重要な使命の一つであると思ふ。われらはわれらの享受し得る最高の國民的榮譽が、ここにもその使命となすべき目標を認めることが出来る。

新體制の原動力は、かくて國民的志操に發起し、そこに自主獨往の國民的人格の生成を促がし、その活動のいとなまれるところ、そこに最高の榮譽が攝受せられ、ここに攝受せられたる榮譽によつて、東亞諸民族の勤勞と生活力とは、新たな秩序と文化との創造を可能ならしめるものである。

## 農業労働力と工業労働力

### 一、農業労働力

戦時體制が強化されるに従つて、わが産業機構は驚くべき變化をとげた。産業の種別は勿論のこと、生産の機械も、生産技術も、従つて生産の質も量も、凡て變つて來たのである。今、日本は、この生産力の急激なる變化過程のただ中に、更に高度國防國家體制を完成しようとしてゐるのである。日本は、どんな困難があらうとも、これをやり遂げなくてはならない運命にあるのである。

日本は、この時局に純乎たる工業的國家の性格をもつて來たのである。國民生活の産業化は、今次の事變によつて起つた、最大の歴史的事實だと私は思ふ。

工業のみならず、農業の方面も、工業に劣らず、重大な問題にぶつかつてゐるのである。農業は國民の食糧生産のための生業である故に、時局の進展の情勢からすれば、その労働力の再編成については、一層に重大な意義をもつて來てゐるのである。由來、日本の農業は、從來は、その生産單位を家族において來たのである。家族的労働力こそ、日本農業の生産力の基本單位であつたのである。問題の重點の一つはここにあるのである。

今、農業内部に起つてゐる、生産手段の變化や、耕地に關する諸情勢や、肥料の關係や、または國民生活が、今現に、農業に要請してゐるところの農業生産の質、量といふ觀點から考へ、更に、農村に起りつつある、生産力の根元としての、人口の動きから考へ合せると、農業の生産單位——經營の單位を、從來のやうに、家族労働力においては、どうもこの時局に適應しないのではないかと思ふ。一戸々々の家族が、その耕地の廣さや、その性狀に従つて、經營計

畫を立ててゐるのでは、國家的要請に適應しがたくなつたのである。耕種の撰擇にしても、作付けにしても、施肥、育成の仕事にしても、また除草や收穫作業にしても、時局下の生産要請や、生産資材の關係から、或は時局下農業労働力の動向からみても、家族労働力を、農業生産力の單位とし、個々別々に農業をやつてゐたのでは、労働力の不足、資材の不足をよく克服することは出來ないのである。これをあくまでも固執してゐると、農業産生力は低下するのである。だから、隣保共助の必要が叫ばれてゐるのである。從來のやうに、五反百姓が多く、多くの農家が、ただほそぼそと食ふだけで事足りるといふやうな農業は、不健全な農業労働力であることが、國民一般の認識するところとなつたのである。ただ細々と食ふだけでは農業ではない。進んで全國民の食糧確保といふ仕事をやり遂げて行かねばならない。さうでなくては御奉公の出來る農業ではないのである。

三反百姓では御奉公が出来ないのである。自ら耕して食ふ、ただそれだけでは農民でない。今まではそれでよかつたのであるが、今日では、農を以つて國に報ずるのである。自ら耕して、自らと、その家族を扶養する以上に、更に一歩を進めて、國民のために食糧をととのへるのである。それは概念的に、倫理的に、さう觀念するのではなくして、ほんたうに、さうでなくてはならないのである。實際に於て、さういふ國民的な百姓に、ならなくては、また百姓としての、生活の實踐に於て、それが體驗を以つて、實證されなくてはならないといふところまで、農民の自覺が進み、またそのやうになるやうにといふ運動が、熱心に行はれてゐるのである。

今度の國勢調査の結果が出なくては分らないことではあるが、わが人口の本業人口は、おそらく、この時局に重大な變化を遂げて了つてゐるであらうと思ふ。農業本業人口が減じて、工商業人口と、公務自由業がうんと増加してゐる

だらうと思ふ。農業人口と工商業人口とは、恐らく、事變前の位置を逆轉してゐることであらうと思ふ。従つて事變前よりも少い人口——労働力を以つて、少くとも、事變前と、廣さに於て、餘りに變化のない耕地を耕すことになるのであらうとも想像される。その上に、なほ食糧生産の増産が要請されて行くのである。それは農民生産に従事する労働力の比較的な減少と、食糧の消費人口の増大といふ、二重の原因に基づいて起つてゐるのである。この意味に於ても、日本農業は正に劃期的な革新期に立つてゐるのである。

これらの情勢の下に、新體制下の農業の労働力の再編成は進んで行くのである。農業の内外の情勢が、上述のやうに變化してゐる以上、従來のやうに、農業労働力の基本單體を、依然として、家族労働力においておくことは許されな

いことだと思ふ。

私はこのやうな理由から、新體制下の農業労働力の再編成は、生産力の基本

單體としての家族的労働力を、部落労働力にまで擴大強化するにあると思ふ。  
 元來、農業労働力の單體としての家族労働力は、極めて特殊の存在である。  
 即ち工業労働力のやうに、風土を異にし、文化を異にした、そして血縁的にも、  
 倫理的にも、何等のつながりのない、云はば、烏合の衆とでも云つていい労働力  
 ではなくして、彼は親子、夫婦、兄弟と云ふ、極めて人間的な、血縁的な、倫理的  
 な結成労働力なのである。農業労働力は元來、功利的な労働力ではないのであ  
 る。利害を超越した、そして最も忍従と、節度とを基調とした労働力なのである。  
 だから、農業は尊く、農家の生活は貧しくとも、強固なものであつたのである。  
 部落の労働力を農業生産力の單位とすることになつても、この農業労働力の  
 特色は、決して失はれるのではないのである。村へ行つてみると、村は常にい  
 くつかの部落に分れてゐる。部落と部落とは、その自然的條件に於て、將又そ  
 の文化的條件に於て、各々特色があることに人々は注意するであらう。自然や

文化のみならず、その風俗、慣習までが部落的特色があるのである。人情は風  
 水によるところが極めて多いのである。

また一戸々々の耕地を観ると、それは戸毎に散在してゐるのである。甲の家  
 の耕地は西に、乙の農家の耕地は東にといふやうに、ちりぢりになつてゐるの  
 であるが、一部落の全體の耕地は、大凡、その部落をとり圍んでゐる。尤も甲  
 の部落の人の作つてゐる耕地が、乙の部落の耕地の中に飛んでゐたり、乙の部  
 落の家の耕地が、甲の耕地の中にあつたりすることはあるにはあるが、全體と  
 しては、一部落の耕地は、全體として、その部落の周邊にまとまつてゐるので  
 ある。耕地は労働力の活動する仕事場である。その仕事場が、個々の家族を單  
 體とする場合には、散在してゐるが、部落全體をとつてみると、まとまつて來  
 る。即ち作業場としての耕地は、家族労働力を單位としてとる場合よりも、一  
 層に生産力の發揚し易い條件になつて來る。

また労働力の點から云つても、部落にある家族は、何十年、何百年の歴史を通して、隣保共助の生活の上に立つてゐるのである。世代を経て、相扶けて來てゐるのである。世代を経たる近隣のよしみなのである。ここに部落労働力の倫理的な強固なつながりがあるのである。家族労働力と云ふ、血縁的、倫理的なつながりの上に、更に隣保共助の世代の生活の歴史を通じての、部落労働力は、一層高度の結成労働力として再認識せられねばならないのである。この部落的結成労働力は、封建治下から明治大正を通じての、國民生活の歴史に於て、明確な認識を得ることなくして経過し來つてゐたのである。ある時は、封建的な萎縮によつて、その結成が崩され、明治・大正に於ては、資本主義經濟、功利的人生觀の洗禮の下に、それがばらばらになつてゐたのである。

今、この曠古の重大時局に於て、この部落労働力の本質を再認識するのである。それが農業労働力の再編成の中心問題だと思ふ。即ち農業生産に關するあ

らゆる國防國家建設の企畫は、この部落労働力を單體とし、基本單位として樹立されねばならないと思ふ。耕作計畫、作付計畫、肥料對策、労働力の組織配分等、あげて部落中心にこれを企畫するのである。否、生産部面のみならず、その消費部面は勿論、文化的社會的施設の凡てが、これに向つて集注されねばならないと思ふ。

## 二、工業労働力

農業労働力に比べて、工業労働力は、その倫理的な基礎が、極めて薄弱であるといふ點に於て、特に注意する必要があると思ふ。私が先づ工業の労働力を問題としてとりあげないで、農業労働力を問題としてここに論じて來たのはここに理由がある。

工業労働力は、農業労働力に比して、全く烏合の衆である。事變になつてから、特にその性格を更に強めたと思ふ。何でもかでも、人でさへあればよい、

生産を生産する勞力でありさへすればよいといふのが、經營を支配した勞働力組織の現實であつたのである。

新體制下の工業勞働力は、先づこの根本問題を再検討しなくてはならない。烏合の衆たる勞働力を化して、有縁の衆たらしめ、利を以つて集められ、集つて來てゐる勞働力を、眞に人間的な、倫理的な結成勞働力たらしめるにあると思ふ。功利的な人生觀に立つた、國民的性格の缺如した勞働力に、奉公の人生觀を附與し、國民的性格たらしめることが、工業の勞働力再編成の一つの重點であると思ふ。かかる勞働力の國民的性格を作りあげるためには、事業經營體は、單なる營利を目標とし、利益を追求するところであつてはならないことになるのは、極めて當然なことである。私は公益優先などといふやうな概念や、理念では、この問題は解決出来るものでないと思つてゐる。もと通り、營利を目標とする團體ではあるが、先づ公益を先にして考へるといふやうなことでは、

勞働力の國民的性格を建設し、創造することは到底不可能だと思つてゐる。

新體制に於ける事業經營は、「公益ヲ廣メ世務ヲ開ク」ことに専念し、それを目標に運營せらるべきであると思ふ。この運營の根本方針の下に於ては、勿論、一旦緩急あれば義勇公に奉ずる信念が、築かれてゐなくてはならない筈だと思ふ。ここには、一點の營利心はなく、功利的な事業方針の存在は許されないとと思ふ。少くとも企業理念はかくなくてはならないのである。また企業理念がここになくしては、勞働力に倫理性は建設され得ず、勞働力に國民的性格を附與することも不可能だと思ふのである。従つて今、わが産業に於ける、各經營體はその企業の根本理念を改變しなくてはならない時局に當面してゐる。新體制に於ける工業勞働力の再編成は、ここから始まらねばならぬ。

次に大切な問題は、勞働力の組織である。日本の産業には、勞働力の組織が殆ど着手されてはゐない。産業報國會の現在の状態では、勞働力の倫理的結成

は可能であるが、労働力をして、その職場の作業に於て、一層に潑刺たらしめ、一層それを活躍せしめることによつて、最高の生産力をかり獲んとする労働力組織の科學的方途は、全然等閑に附せられてゐると云つてよいのである。

分化し、専門化し、その分化し専門化した作業を綜合し、系統づけることによつての、生産目的のより高度の合目的な遂行には、その分化し、専門化した作業の各部署に労働する労働力は、極めて適任であり、その適任なる労働力が、一つの職場に於て、横に結びつき、更に生産體系の全部に、縦に結合され、その能力を遺憾なく發揮するやうに、組織されねばならない。

勞務者の側から云へば、その從事する分化したる、極めて専門的な部分的作業が、彼れに隣接し彼を圍繞する彼の作業と直接間接に關聯してゐる作業と、よく技術的に適應するのみならず、彼はその生産體系の全體に對する、彼の部分作業の地位についての明確なる認識をもたねばならない。全體に對する部分

の認識、全體と部分との價値の認識が明瞭に自覺されなくては、かくも複雑化し、専門化し、分化したる生産體系の中に於て、その労働力を發揚することは不可能であると思ふ。これは現下のわが工業的技術の段階に於ては、誠に重要な労働力啓發の事業なのである。技術的水準を高めるのも、労働力の質の向上も、一つにこの認識から出發しなくてはならない。この意味に於て、労働力の再編成は、労働力に教養を深めしめることであると云つてよい。而もここにいふ教養とは、漠然たる教養ではなくして、生産體系の具體的なもの、生産技術の具體的過程に即したる教養にかかつてゐると思ふ。この教養の上に、その生産體系に於ける労働力の一貫したる組織が成るのである。

労働力組織化の第二の重點は、その健康と、體力の強弱に於て、また、男女の性と、年齢、體質の差別段階によつて、また熟練と未熟練の差別によつて、労働力の價値を區別すると同時に、それをそれぞれの本質的な能力の特性に従



つて、適所に配置分配する仕事である。この仕事は、今わが工業には極めて部分的に行はれて、一部分は成功を以つて實施されてゐるのであるが、大部分は未だ、自然的な無意識的な状態に放置されてゐるのである。

新體制下の労働力再編成は、この状態を一蹴して、労働力の特性による科学的組織化に勇敢に突入するべきだと思ふ。始めからそれは成功を以つて行はれるものではない。まだそこにはいろいろな體驗が、科学的（生理學的、心理學的）指導の下に積まれなくてはならないことは勿論のことである。

多くの工場では、今現に、男子に代ふるに、女子の労働力の代入が、ある時には極めて用心深く、またある場合には、極めて大膽に行はれてゐる。また成人労働力の代りに、青少年労働力の代入が、わが日本戦時工業の仕事場に全面的に行はれてゐるのである。而しそれらの多くの場合に於ては、人間の能力に關し、人間の特性に關する考慮は、ただ過去の經驗のみの指導するところであ

つて、殆んど人間の科學は慎重に採用されてはゐない。これが日本工業の技術的水準の向上を阻んでゐるのである。

新體制下に於ける労働力再編成の第三の重點は、健全なる生産技術の創造にある。不健全にして、不良なる生産技術の排除に全力が集中されねばならぬことである。何となれば、新體制下の企業は、國民的性格の基調の上に結成せられたる労働力を以つて營爲されるのである。またそれは單なる營利追求の場所ではなくして、實に世務を開くため、公益を廣めるため、義勇公に奉ずるためにといふ根本理念に於て建設し、運營されてゐるのである。従つてかかる理念の下に於ける企業内に、不健全作業や、不良技術が平氣で公然と行はれてゐることは許さるべきではない。産業關係者、生産關係者は、その全力を盡して、人間の生命を脅かし、人間の健康を害ひ、労働力を不當に消耗せしめるあらゆる原因、並びにそのやうな生産技術を、努力以つて全滅すべき責任をもつもの

である。これに關しては經營者は勿論のこと、生産技術者、勞務管理者、醫務擔當者は、極めて密接な科學的技術的協力に於て、熱心なる努力を、持久的にこれに捧ぐべきであると思ふ。工業安全は今や新體制の重要方策として認識されねばならぬのである。

## 勞務對策の文化的意義

### 一、二群の青年人口

私は最近、ある農村で、農業に従事してゐる青年の幹部約二十名と懇談する機会をもち、更にこれにつづく他の機会に、同じ農村から、ある軍需工場に通勤してゐる青年勞務者約三十名と懇談したのである。

この二つの懇談會を通じて私に感得されたことは、農業に従事してゐる青年の集會は、どこかなごやかで、しんみりとした氣配がある。みな無口である。話をするにしても、ぼつとりぼつとりと地味で訥辯である。言ひたいことも全部言葉には出せないといふ様子である。氣分も性格も重くて動かない。たとへ

動いても激動することはない。それにもかかわらず、どこか朗らかで、明るく  
て、屈托がない。寄り合ひの場は誠に自然で、みなの中に一種の親しみが支配  
してゐる。

勤 勞 と 文 化

彼等の體格は學生達に見るやうな、伸びるだけ伸びてゐるといふのではなく、  
どこかおさへられてゐるといつた感じで、云はばヅングリ屋が多いのではある  
が、その代りに、皆がつちりとしてゐる。よく實が入つてゐる。鍛へられ、野  
良仕事から陶冶されたといふ様子がありありとみえてゐる。陽にやけた顔色の  
中に、青年らしい頬の赤みさへもたたえてゐる。健康そのものといつた姿であ  
る。その健康に輝く顔の中に、物慾にけがされない眼なざしが、青春の希望を  
たたへてゐるではないか。話の内容は、作物のこと、農具のこと、肥料のこと、  
讀書のことだ。相當はげしい労働もあるのだが、疲勞にいたむ話などは殆んど  
出ない。農業労働は楽しみだとは云はないが、彼等にそれが苦痛であるなどと

勞 務 對 策 の 文 化 的 意 義

は一言もきかない。むしろ種を播き、苗をそだて、實らせることに、ある樂し  
みを覺えてゐるらしい。最も重い起耕や碎土の仕事すら、育て、稔らせるたの  
しみの前には、仕事の遣り方の研究事項であるに過ぎない。

これに引きくらべて、工場に勤務する青年の集ひの雰囲気は斷然、別個の異  
る世界である。集つてゐる青年達はいかに年若くとも、彼等は獨自の生活をも  
つた、獨立者の面影がある。この風格は農業青年には見られないものである。  
彼等が思ひ思ひに異つた考へをもち、個々の異つた性格に於て判斷し、行動す  
る人達であることが感知せられる。その異つた個々の存在が、工場青年勞務者  
の集りを全體として特色づけてゐるのだ。従つて農村青年の集ひに見たやうな、  
のどかさはなく、しんみりともしてゐないが、どこかに一抹の潑刺さがある。  
而も私はその潑刺さのなかに、覆ひつくされぬ疲勞と焦慮の姿を彼等に認めな

くてはならなかつたのだ。また彼等はかなりよく語り、よく辯ずる。彼等の語る  
とき、その顔面筋肉ははげしく動き、言葉に體動を伴ひ、思想の發表にゼスチ  
ユアを伴ふことも、農村の青年には見ることの出来なかつたところである。即  
ち彼等の感情は昂ぶり、思考の流れは急なのだ。彼等も亦青年らしい朗らかな  
明るい一面をもつてゐた。私は彼等から向上をめざし、向上に努力する氣魄を  
感じたのであるが、そこには苦闘と憂悶のかすかなる響きをきいたのだ。彼等  
の體格の發育状態から受ける印象は、農村青年のそれとは全然異つたものであ  
る。農村青年が伸び伸びとはしてゐないが、その肉體の内部に旺んなる發育力  
がみなぎつてゐるに比べて、工場青年は、發育力がいたく傷つき、弱められてゐ  
る。彼等は彼等の肉體に迫つてゐる、ある消耗力の間隙をぬうて、その發育を  
とげてゐるといつた様子である。彼等の身體には實が入つてゐない。仕事によ  
つて鍛へられた身體ではなく、仕事のために消耗され、發育の力によつて、や

つと青年らしい外形を保ち得てゐると云つてもよいだらう。全く健康だといふ  
感じを、私は彼等から受け得ない。また彼等に青年らしい、はり切つた頬の圓  
さと赤さは見られない。その眼なごしの中にみゆる青春の希望の中には、かす  
かなる生活の苦闘と慾望との陰影がひろがり出やうとしてゐる。

察するところ、彼等は生活の闘争の中に、勿論、彼等の生の悦びをつかみと  
らうとして努力してゐるのだ。彼等の仕事場、彼等の仕事、彼等の生活は農村  
の青年達のそれらに比して、良い意味に於ても、また同時に好ましからぬ意味  
に於ても、驚くべく生活苦にみちてゐることが、彼等の語るところにあらはれ  
てゐる。従つて彼等は休養を欲し、娛樂を要求する。仕事を習ひ修めることは、  
彼等の樂しみでもあるが、彼等はその樂しみの外に、外からの娛樂を求めるこ  
とに切なるものがある。

同じ一つの村に生れ、その同じ村に共に育ち、その村に學んだこの二群の青年は、小學校を卒業するとともに、彼等の撰び進んだ二つの相異なる職業——環境と生活によつて、かくも異なる性格をもつた青年を造りあげたのだ、私がこの農村に観ることを得た、かくも驚異すべき「發育しつつある二群の青年」は、實は、わが日本人口に於て、現實に進行しつつある深刻なる人口の質的變化の過程の重點の一つなのだ。

## 二、高度國防國家建設と勞務對策

工業の地方分散はいろいろな問題を起して来るが、その中でも、それが人口の質的變化、就中、國民の生活とその作業能力に與へる影響は特に注目し値すること、私は暗示したつもりである。今、私は、ここに二十歳未満の青年人口の職業分類を示し來ることは不可能であるが、現下の狀勢からすれば、農業に従事する青年の數に比して、商工青年の數は斷然多數であることは周知の事

實である。事變の進展に伴ふ、農業青年人口の工業的青年人口への移動は、上に述べたやうな國民的性格の變化を通じて、わが人口に質的變化をもたらさずにはおかないであらう。而もその質的變化の動向は、果してわれわれの期待し、われわれがもつて新秩序の建設の雄圖を遂げんとする基調としての、わが人口の本質的強大を招來し得るものであらうか。私は人口問題の最重點が、この國民生活の工業化に原因する質的變化にあると思ふ。

ここに於て私は、國家の勞務對策の高度國防國家建設政策としての重大意義を認めざるを得ない。私が農村から工場に通勤する青年群に於て觀たところのものは、正しく人口の質的變化に關する一つの重大な科學的な印象なのだ。この印象のなかに把握せられたる青年の生活の質的、形態的變化こそは、正しく今日の高度國度國家建設對策の缺陷を反映するものではないであらうか。

勤勞する青少年に對する勞働立法は、未だ多くの正に爲さるべくして、而も未だ爲されてゐない重要な事項を逸してゐる。例へば勞働と休養とに關する點のみについてみても、今日の立法は、青少年の體力の發育を擁護し、その作業能力の天賦の發育を保證するには甚だ不十分である。青年學校が義務化せられ、臨時技術工養成所が出来、青年團の組織と活動とが強化統一せられ、移動防止令が發動せられ、體力法の實施の範圍が漸次擴大せられ、定期健康診斷が従業員一〇〇人以上の事業場に實施せられることになり、産業衛生、災害防止、安全教育等は漸次整備せられつつあるのであるが、併しこれらの方法によつては、作業状態の徹底的變化は望み得ない。何とならば、いかに保護對策を樹立し、施設を整備しても、これらの多くが利用されずに放置せられてゐるのである。その據つて來るところは、或は巧利的な便宜主義に原因することもあらうし、或は賃銀の出來高拂制の廣範圍に及ぶ實施の現状からも來てゐるのである。特

にこの出來高拂制度は、青年勞務者に關する限り、最も憂慮せらるべきものである。私はわが工業勞務者の工業技術の水準から考へ、時局的な意味合ひからして、これを全面的に拒否するのではないが、出來高拂賃銀制は、修業の途中にある、學び修め、以つて技術的に陶冶さるべき對象者としての青年勞務者に對しての、最善の方法ではあり得ないと思ふ。またこれあるがために、青年の國家に對する第一任務としての、その心を養ひ、その身體を鍛り、その人格的教養を高めやうとする青年の志は、ともすれば利を追ひ、地位を求むるために消耗せられるのである。かくして人口——ことに青年人口の中に、國民としての志操が稀薄になり、低劣化するのである。

利を求むる心と行動とは、苦痛としての勤勞と隣合つてゐる。然るに青年人口によつて、今日の如く、かくも廣範圍に行はれる工業的勤勞は、勿論彼等が

身を立て、家を齊へ、國家に奉仕するためのものなのである。青年の行く勤勞が彼等の志を立て、これを遂げしめるためには勤勞の生活に於けるあらゆる障礙を排除して、ひたすらに業を習ひ修めるため、即ち勤勞は彼等の立志健闘の稽古臺ではあるが、その健闘の後には、生の展望が更に擴がり、その人の志望が一層に強められ、高められて、それにはげまされて、青春が生ひ立つて行かねばならぬのである。

これに反して、勤勞が彼等に苦痛とし、苦役として體驗せられるとき、増大して行く人口の中には、この苦痛の勤勞を離脱せんとする欲求が當然に普及するのである。勤勞を厭ふ人口が、人口中に増大することは、國民の生産力が低下し、國民の經濟的生活が破綻し、生活の慰樂が失はれる原因となるのである。かくて人口の量は、その量自體の中に内包せられてゐるところの、國民の利を

追ふ心、そして最後には勤勞を厭ふ志操と行動とから影響せられ、ここに國民の生存の危機が招來される。大ローマ帝國の崩壊は、ローマ民族の生活に於ける、かかる歴史的過程の所産として認められてゐるのである。また封建的江戸時代の三百年に亘る平和のもたらした安逸と、用を重せずして、利のみ追及した庶民生活の歸趨も亦、わが人口の量的發展の上に、同様の影響をもたらしたことは明白な事實であると思ふ。

身を立て、家を齊へ、業に於てはげむこと、即ち生活の確立への意志的努力を後廻しにして、ただ利のみ求むる生き方が、人口の質的、量的變化を來たす要因である。而もかかる要因は、今日の情勢——即ち國民の生活態様に於ては、國民生活の工業化に密接に關聯してゐることを、私は指摘しようとしてゐるのである。

今日の青少年の従事してゐる。否彼等が動員されてゐる工業部面の作業は、ほとんどその凡てが分業化され、専門化された作業部署である。例へば飛行機の翼は軽金属の小さな板の寄せあつめ、継ぎ合せて出来てゐる。これには何千何萬と云ふ小さな孔をあけ、その孔にリベットを以つて鋸を打ち込まねばならない。この根氣の要る、單調な作業を、多數の青年工が分擔してゐる。一日何千回の鋸打作業を、くる日もくる日も繰り返してやつてゐるのである。また今日多數の青年又は青年女子が、小さな機械の部分品を、旋盤について造つてゐる。同じ形をした、同じ重さと大きさの製品を、時としては一日に數千個も造りあげるやうに命ぜられてゐる。彼等は彼等の意志と、責任感からして、その作業の單調と闘ひ、無味乾燥なる作業から來る倦怠と闘つて、その生産を持続して行くのである。従つてその生産に對する態度は、非常に消極的ではあるが、その倦怠と單調とを征服する意志的な努力は、これを高く評價してよいのである。

またその意志的努力こそ、今日の工業に於て、青少年が業を習ひ、志を立てる生活過程の最大の重荷なのである。彼等は先づこの重荷の試煉の前に立つて勇敢に闘つてゐるのである。

わが増大する人口の中では、常に人口の工業化が高まつてゆく。而も工業化する人口は、倦怠と單調とを征服して、生活に悦びをもたうとする意志的努力を、その全生涯を通じて、つづけなくてはならないのである。彼等が人たるためにその業を習ひ、その生活を營むためには、彼等がその意志的努力を傾倒して、これと闘ひ、これに克たねばならないものなのである。

私がここに高度國防國家建設政策としての勞務對策の重要性を指摘するのは、この人が人たるため、青少年が優れた國民的資質を完成するために、その青年期を闘ひぬかねばならぬ、彼等の意志的努力を極めて重大視し、これをよく



援け、従つてはこれをよく伸ばし、以つてこの苦闘する青少年に、生活の希望を明示し、その志の達成を可能ならしめ、その生活に愉悅を與へることの極めて緊要なるを痛感するからである。

勞務對策が強化されなくては、彼等はその意志的努力を放棄するに至る危険があるからである。勞働政策は勞働力の保護といふやうな、どちらかと云へば消極的な理念に立つものではない。それは國家の興隆をめざし、國民生活の向上、文化の發揚を目的として行はれるのである。これをわが國民の全部、特に事業經營者がよく理解し、國家の勞働政策に積極的に協力し、これをその事業場に忠實に實行しなくては、青年人口の意志的努力は、遂に絶望の淵に臨むことになり、彼等の生活の向上は停止する。絶望しないまでも、彼等の仕事場と、その生産的行動とは、彼等に生活の何等の愉悅をもたらさないが故に、彼等は意志的努力を放棄し、その技術能力は向上せず、その生活は中心を失ひ、彼等の

生産的行動は、ただ賃銀を追求する手段となり、賃銀を獲得することが、生産することだとの認識に墮せざるを得ない。かくて青年人口の生産的行動が、人口の質を高め、その活動のねうちを向上するよりも、むしろ人口の質を低下し、その活動の價值を下げる結果となる。この状態の下では、國家生産力は、その高度の機械化されたる生産技術のために、また、ただ生産力を保持せんとするあらゆる方策の下に於て、その高さ水準を維持しつつも、その底流に於ては勞働する意志、生の向上への意志的努力が減退し、作業能力の基本要件が弱められて来るから、生産力の全面的低下と、生活意欲の消耗とが、徐々に進行することになるのである。ここに國民の能力の質的低下の現代的な危機があるのである。

### 三、勤勞層の文化啓發

ある國民のもつてゐる作業能力は、その國民に内在する人格的活動の全貌を示すものだと私は思ふ。人は作業し、勤勞することによつて、その心身を鍛鍊

し、陶冶する。作業能力の向上は、その教養の向上であり、人格活動の發展なのである。従つて人口の職業分類は、その國民經濟の状態を示すものとして意義あるのみではなく、もつと本質的には、その國民の人格活動——勤勞能力の質的表現としてこれを観ることが出来る。軍備に支出する經費が外力によつて制限せられても、これを士氣の振作と、精兵主義を以つて補ひ、これに我慢し、堪へて行かうとした、嘗つてのわが軍縮時代や、大戰後特にヒットラー政權の初期を通じてのドイツの國民的志向は、この意味に於て、國民の質的強化政策であつたと云つてよいのである。

私は戦時下の炭山で、地下數百尺の切羽に勞働する採炭夫の作業を屢々見學したのであるが、そこには事變前に比較して、低劣な體力をもつてゐる採炭夫の多數が作業してゐる。併し彼等の勞働を仔細に觀察すると、體力に於て、體格に於て屈強なるものが、常に出炭能力の高いものではない。低劣なる體力

をもつてゐる採炭夫も、その國家的任務の重大性の自覺の上に、その作業にあつて、よくその工具を利用し、勞力を活用し、時間の浪費を排除し、資材を惜んで、工夫以つて勤勞するものに、高い出炭能力を認め得たのである。即ち彼は筋力に於ける低劣を、智的に、技術的に相補つてゐるのである。ここに作業能力の發展と創造とがある。

またわが工業界の人達の間には、普遍的に知られてゐるところによると、勞務者の作業能力の最高頂は四〇—四五歳である。これ以後の年齢に於ては、作業能力は急激に低下する。最近私の同僚が農村住民について調査した成績によると、両手の協調を必要とする作業（鋏を以つて紙にかかれたる型を切取る作業）も巧緻性を要する作業（箸で大豆をつまむ作業）に於ても、男は十三歳、女は十歳まで急速に作業能力の發達を示し、尙二十歳前後までその緩徐なる發達がみられるが、それ以後はほとんど一定の高さを保持し、男女ともに五〇歳以後に於ては、

漸次その能力を低下することが實證された。かくの如き至極簡單なる作業に於てすら、五〇歳は能力低下の境界をなすのである。ましてや、更に精密を要し、一層の速度を必要とし、或ひは大なる筋肉的活動乃至は神経的緊張を必要とする作業に於ては、作業能力はもつと早期に減退し、その最高頂は、時としては三五歳乃至四〇歳であり得るのである。ただ現代の工業的労働の多くの部署に於ては、その作業の機械化は極めて急速に促進せられつつあるから、人がその作業能力の減退期に入つて後も、彼は彼の長年月に互る熟練のために、彼の作業能力の低下を、それによつて補ひ、やつと彼の賃銀収入のもとの高さを維持し得てゐる場合が多いのである。ここにまた國民の勤勞と、その仕事場とに對する透徹した認識が必要であり、その認識に基づいて國民の活動力の質的低下を防止する必要があるのである。うつかりしてゐると、いつの間にか國民の活力は低下して、どうにもならない事態が発生するのである。

國民に於ける作業能力は、勿論、その國民のもつてゐる遺傳的素因の上に築かれるのである。従つて國民の作業能力は、人から人への生物學的な、且つ血縁的な、つながりの上に、その發展の基礎をもつてゐるのである。併しこの遺傳的な國民の能力素因は、これに對して適正なる陶冶の力と指導力とが、機をあやまたず、機を逸せず、これに加へられるときに、始めて、その健全な發達を遂げることが可能である。

國民中に於ける勤勞層は、世界いづれの國民に於ても、またあらゆる國の歴史を通じて、常に最も大なる部分を占めてゐる。従つて勤勞人口層の作業能力の強靱と、その旺盛發刺たることは、その國民全體の興隆を意味し、勤勞人口層の劣弱化は、その國民全體の衰退を意味するものである。人口現象に關心をもつものは、この事實を等閑に附してはならない。ある國民の勤勞能力の如

何は、常にその國民の運命を左右しつづけて來たのであるが、それは勤勞人口層の勤勞能力の質の如何にかかつてゐるのである。

またある國民の作業能力と云ふのは、その國民を形成する各個人の、各自の一生涯の生活の中に起つて來る、いろいろな外部的な要請に對して、よくこれに對處し、適應することの出来る能力だとも考へられ、また各自の生活の内部、即ち心的又は肉體的な内部的要請に對する適應の能、又はその適應能力の豊かさ、正しさであると云つてもよい。これが國民の生活能力——作業能力の健否を示す尺度だと考へてよからうと思ふ。

従つて適正な生活態度とその正しさ、豊かさ、廣さ、強さと云つたものが、國民の働らきのね、うちを左右することになる。かかる意味での國民の働らきねうちの向上すること、またこれが強化されること、そしてそれが國民の大部分に普遍的なものになること、さういふ人口政策が人口の強大を意味し、それを

表徴するものであつて、これが人口政策の重點にならねばならぬのである。

かかる意味に於て、勤勞能力——作業能力向上強化策としての勞働政策は、その從來の消極性を排除して、うんと積極的、即ち國民の生活力の質的強化政策へと轉換し、而も全面的に展開せられねばならない。國民を強く且つ健康ならしめ、質實剛健なる國民性を造り上げる政策は、今日の狀勢からすれば、勞務對策、勞働政策を重心として進めらるべきものであつて、勞働政策の強化擴充を企圖しないでは、國防國家政策はその政治的意義を失ふものである。

時局は正に國民の勤勞の全面的な、強力にして適正なる發揮を要請してゐる。時局解決の決定的な力の一つが、國民の勤勞と、その打つて一丸となつた組織的結成力の發揮にあることを人々は漸次自覺しつつある。旺盛にして強力、發憤倦むところなき、士氣旺んなる勤勞こそ、國家の運命を開拓する唯一の推進力であることが認められつつある。従つて國民に内在する作業能力の國民的繼

承をして、よく育ち、よく伸ばしめ、またこれを強め、育くむ政策としての労働政策は高度國防國家建設の重點だと云ふのである。

#### 勤 勞 と 文 化

國民の作業能力と云ふ概念の下では、先づ第一に、その國民を形成する個人が、その身體と精神との發育に現はす力、即ちその國民全體の特質の發育に於て現はれる力——國民の能力の質的な發育能力といふ部面を考へる必要がある。國民の基本單位としての一人の國民にとつては、彼が自己の心身の能力の健全なる發育を所期することは、彼がその國民の特質を維持する力であり、また彼がその國家と國民とに對する第一任務である。この任務は、親から子へ子から孫へと、民族の世代を貫通し、その血脈を通じて行はれるものであるが、また同時に、家族のもつ生活の態度、習俗、文化と云ふ、多分に倫理的な生活の中に育くまれ、その中に陶冶せられて、行はれるものである。

#### 勞 務 對 策 の 文 化 的 意 義

従つてここには勿論生物學的意義に於て、また優生學的意義に於ける、國民の能力の陶冶と鍊成との問題があるが、同時に家族のもつ生活態度と習俗乃至は文化と云ふ倫理的な意味合ひが、極めて重視せらるべきであるから、作業能力の發達、云ひかへれば、人を育ててその生活力を充溢せしめ、質實剛健なる國民力を育成することによつて、高度國防國家の建設を企圖するためには、國民の勤務層に對する文化啓發の事業、即ちその生活に於ける習俗を高め、生活態度を確立する方策としての労働政策の重要性があるのである。それ故に若し労働政策が從來の如く、ただ單に資本と労働との調整協同といふやうな概念を止揚し得なかつたり、或ひは労働による國民能力の消耗の防止、労働力の保全といふやうな、どちらかと云へば、極めて消極的な意味合ひに於てのみ實施されたのでは、強力な、そして優秀な國民能力の形成を意圖することは不可能であつて、かくては國防國家體制の樹立は、到底出來ないのである。

國民能力の劣弱化は、國民中の勤勞層に於ける倫理的、文化的貧困に由來することを深く考慮しなくてはならない。その倫理的、文化的貧困は、勤勞層に對する文化の啓發と習俗の培育とに缺陷があるからである。即ち勤勞層が、常にその國民に繼承せられ、これあるがために國民生活を特質づけてゐる、最高の倫理的文化的の繼承からおき去りにせられ、そのために、勤勞層の生活の中に傳承されて潜んでゐる能力が、萎微し、沈滯し、活力化しないからである。「依らしむ可し、知らしむ可からず」と云ふ政治的方策が、嘗つてはわが封建時代にとられてゐたのであるが、それは全く國民の大部分を占めた勤勞層に對しては、その文化的、倫理的貧困を招來せしめる以外の、何物でもなかつたのである。ここに私は文化政策の重大性を認めるのである。

勤勞する國民層、特にその家族といふ血族的な、倫理的な單體に對しては、

わが國民生活の中に、國民の意志によつて建設せられ、繼承せられてゐる、最高の倫理と最高の文化とを浸透し、これを普遍的ならしめる政治的方策が不斷に作用しつづけられねばならない。この政治的方策が政治力として勤勞層に浸透する時、そこに生産力の擴充を可能ならしめ、また高度國防國家の建設を可能ならしめる推進力としての、勤勞層の習俗が創造せられ、向上せられ、新たな文化が發揚せられる。然しながら、若しその政治力が、ただ單に勤勞層の生活の周邊をつつみ、その外被をとり繕ふのみの力しかもたず、いはば鵠的なものであつては、民力は向上しない。あくまでも、生活の内部に深く滲み透り、國民を特色づけてゐる、資質の繼承を益々純化し、強化し、その文化的價値を一層に向上せしめる政治力でなくてはならない。ここに於てこそ、勤勞層をして、發憤して食を忘れ、樂んで憂を忘れしめることが出来るのである。

#### 四、勞務對策に於ける倫理的貧困

私の最も重大だと思ふのは、國民の一人々々が、一人残らず、同じ「志」をもち、その「志」を日々に實現するやうに努力することだと思ふ。かかる生活態度、かかる國民的志向を、國民の中に普ねくかもし出し、それをだんだんと堅固に、熾烈に育成し、それを東亞に普ねからしめ、それを世界に宣揚することが、國民の政治的行動だと思ふのである。新體制はここから始まらねば、またかくのごとく國民の中に滲透しなくては、樹立されないと思ふ。國民の中にかもし出される「志」の焰が、天業翼賛の國民的傳承たることはここにいふまでもないことである。ただ「志」といへば、それでよいのである。お互によくわかることなのである。しかし、今日では、その「志」の中には、東亞の諸民族があり、その推進者、その文化啓發の先驅者としての志向が附加せられ、さらに廣く、わが「志」の中に世界を内包しようとするの展望が加へられつつあるのである。

國家總動員體制が強化されてゆくほど、國民の保健政策、體力政策は重要な意義をもつて来る。國家百年の大計はここにこそ、眞に定められるからである。今日までは、どちらかといへば、體力や保健政策などは、常に第二義的に取扱はれて来たのである。それだから、強固にならねばならない總動員體制に龜裂が出来、ともすればばらばらになるのである。しかもわが勞務對策に、一貫した、確乎不動の指導精神がなく、信念に立たず、科學に確かりと基づかず、その時、その時の事情に應じて、その場しのぎの、云はば便宜主義が多くの場合支配したのである。

また勞務對策は、いつも國民を對象とし、人間を取扱ふ政治の部面だといひながら、實は知らず識らずの間に、人間を、國民を「物」と同じ觀念で取扱つて来たのである。いつも「經濟」に追従し、經濟財政政策に合致するやうにの

み強要せられ、國家財政や産業經濟の許す範圍内だけの政策が實施せられ、一步進も、「物」をけちらし、財政障壁をのり越えて、經營經濟の鐵壁をのりこえて、敢然として人間の價値の重んずべきこと、勤勞の尊ぶべきことを主張し、國民の品性を高めるための、すばらしい意圖がなされなかつたのである。いつも「物」の範圍の中で、人間を考へ、經濟の許す範圍でのみ、國民の生活力を考へて來たのである。それでは國民が萎縮し、民力が思ふやうに伸暢せられず、勤勞力と生産力とが伸ばされなかつたのである。

新體制では、かかる従來の觀念は一掃せられねばならぬ。新たなる政治力はこの傳統を破棄しなくてはならぬと思ふ。「物」に支配されないうで、「物」を支配し、「物」を創造し、「物」に價値を附與し、かくすることによつて、國力を伸張し、強化する根本原動力としての、國民の生活力を發揚するための、強力

なる政治力が新たに生み出されなくてはならぬと思ふ。

勞務對策には、統一された魂が入つてゐなかつたのである。否、魂があるやうに見えたのも、ただの觀念であつたのだ。大切なことは、國民が「志」を起し、その「志」を各自の生活に實踐せんとする強固な意志に奮ひ立つことである。それを扶け、それを育み、それを強めることが、人間を——國民の勤勞を直接に對象とする勞働政策の核心だと思ふ。

勞務對策に倫理的、哲學的貧困があつたのだと思ふ。それに基づいて、科學と技術との貧困が伴つてゐたのである。今日に於ては、そのたえて久しき倫理的、哲學的貧困を排除するにあると思ふ。「物」の前に萎縮し、經濟と財政の鐵壁の前に立ち止つて、動かうとしなかつた消極的態度を一掃し、この曠古未曾有の重大時期において、國民をして各々その「志」を遂げしめ、その生活力



を發揮せしめるがために、國家のあらゆる力を動員すべきだと思ふ。科學と技術の陣容の動員も、それが單なる物動計畫實現の意圖に止まつてゐる間は、國力は本當に根抵から伸びない。それが國民の生活力を高め、國民の文化水準を高め、國民的資質を高め得た時、すなはち國民自らの生活を根抵から更新し得た時に、始めてその眞價を發揮し得るのである。科學と技術との振興がその對策の重要な役目を荷つて立つのもよいことである。勞務管理組織の刷新と強力化もよいことである。産業報國運動の徹底も意義のある仕事であらう。しかし、これら勞働力の對策に關して從來の缺陷は、一貫した指導原理の缺如である。勞働力に關する限り、まだまだ便宜主義と功利主義とが全面的に支配してゐる。

勞働力對策の最高點は、物動計畫、生産力擴充計畫における、現在の根強い唯物主義を打破することである。「物」を造ることのみに專注しないで、人間

を、優秀なる資質を有する勞働力を造り上げること、もつと眞劍にやることである。「物」の計畫から、「人」の計畫への轉換である。

##### 五、東亞勞務對策の理念

日滿支を通じて、東亞の諸民族の勞働力を潑刺化し、諸民族をして、その生業を楽しみ、その勤勞に悦びをもたしめ、以つて生活の安定を得しめることも、勞務對策の重點の一つだと思ふ。今、東亞の天地を覆うてゐる勞働力不足の前に、人々はたじろいであるではないか、ともすれば物動計畫の實現に支障を來し、人々は自信を失はうとしてゐるではないか。

かくのごときは新秩序建設の重大な支障であり、不安である。四億の支那民衆の生活力に乗りかかるのである。三千萬の滿洲民族の生活力に生命をふき込むのである。二千萬の朝鮮民衆に、生業の愉快を腹の底から明識させるのである。暑熱に眠れる南方の諸民族に、新たななる生活の展望を與へるのである。そ

これらの全部は勞務對策なのである。

かくのごとき理想を實現することが、東亞の新體制なのである。かくて日本の勞働力問題は、今や東亞の諸民族を包含することになったのである。東亞の盟主としての日本の新體制において、勞働力問題の重大性はここに存すると思ふ。この仕事の完遂によつて、日本は世界に指導力をもつと思ふ。これこそ正に皇道政治の根幹だと思ふ。しからは、新體制における勞働力政策の指導精神は何か？ 私は、國民の仕事場に、東亞諸民族の仕事場に、「明德ヲ明カニスル」にあると思ふ。それ以外に方法はないのである。東亞の天地に、またそのあらゆる生産組織の中に、またその勤勞の生活に、「明德ヲ明カニスル」ことに、全力を傾倒すべきだと思ふ。武力の使用も、權力を以つてする威壓も、この目的をはたす手段に過ぎない。徳に隣りがある。徳は孤でない。明德に諸民

族が頭を下げるのである。かくてこそ吾等に對する諸民族の信頼を助長し、情誼をかもし、秩序が生れ、禮節が興るから、諸民族の生活力が高まり、その生活は安定せられ、ここに東亞の文化が浸々として興隆するのである。私は滿洲や北支の現下の勞務對策を視察して、この感を深くするものである。

勤勞と文化

昭和十六年十一月十日初版印刷 (三〇〇〇部)  
昭和十六年十一月十五日初版發行  
昭和十七年五月十五日第二版印刷  
昭和十七年五月二十日第二版發行 (二五〇〇部)

出文協承認  
あ70122號

有所權版



著者

暉

峻

義

等

東京市世田ヶ谷区  
北澤二丁目一六三番地

發行者

井

村金

造

東京市小石川區春日町  
一丁目一番地

印刷者

小

山鐵次

郎

東京市京橋區  
越前堀二丁目一番地

●定價

金壹圓八拾錢

發行所

株式會社

科學主義工業社

日本出版文化協會會員番號一〇六五〇一號

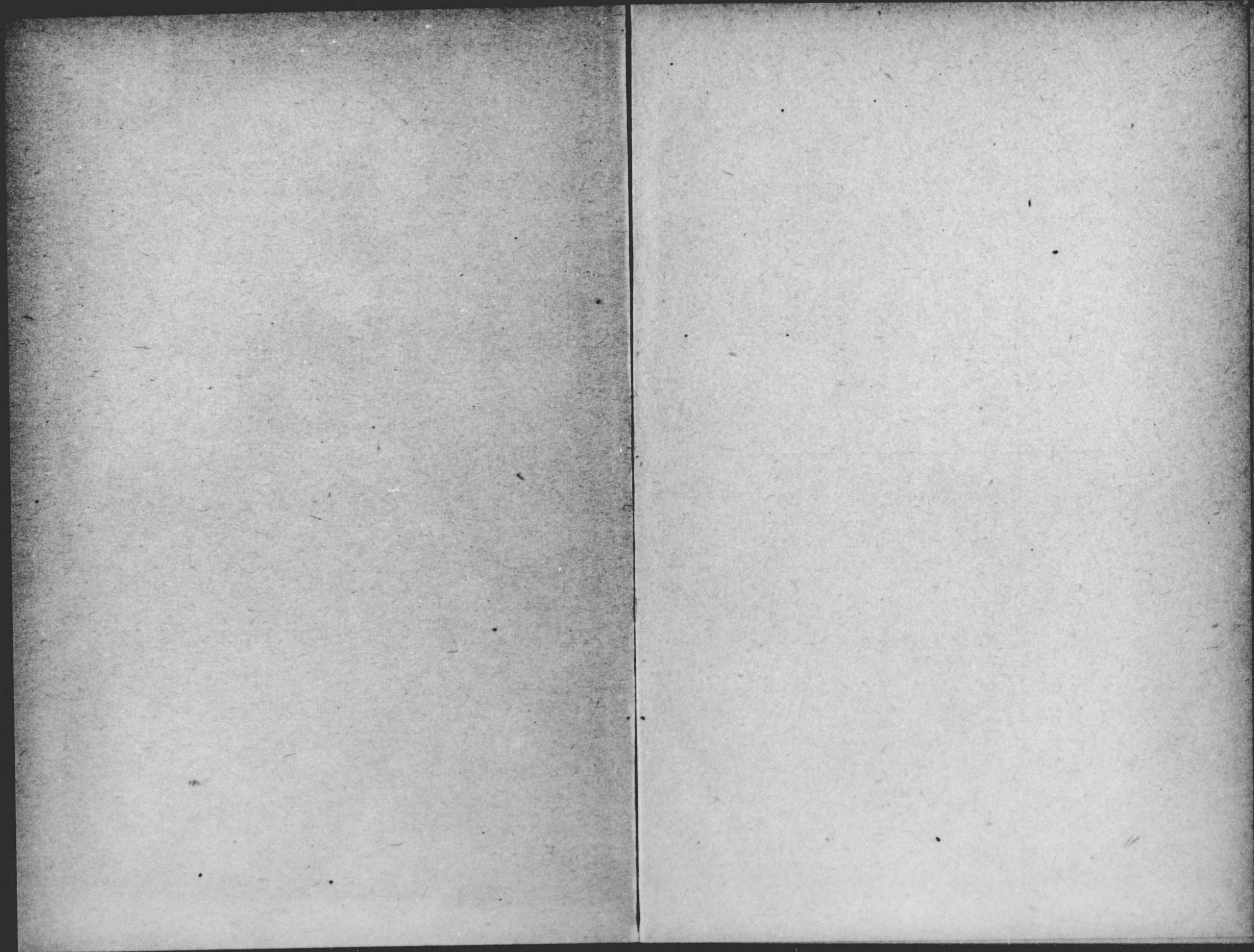
東京市小石川區  
春日町一丁目一番地  
電話小石川(代表)三一七一九番  
振替口座東京二五〇六番

配給元

日本出版配給株式會社

東京市神田區淡路町  
二丁目九番地

(小出版圖書中務・丁亂・丁のまのり)  
社直接には取換へたいのまのり)



九品書局

144

33.5.13

